



萩ジオパーク構想

日本ジオパークネットワーク

正会員加盟申請書



2018年4月

萩ジオパーク構想推進協議会



はじめに

2016 年、私たち萩ジオパーク構想推進協議会は、日本ジオパークネットワーク正会員加盟を申請しましたが、認定は見送りとなりました。「萩にジオパークは本当に必要なのか?」「地域の課題を解決する手法としてジオパークは最適なのか?」。地域住民との話し合いを何度も繰り返し、地域の現状と向き合い、大地と向き合い、先人たちの生き様と向き合って、あらゆる側面から考え続けてきました。

あれから 2 年が経とうとしています。ジオパークの理念をより深く理解し、テーマを見直し、基本計画を一から作りました。“大地と人のつながり”をキーワードに「地球の視点で『萩らしさ』が“見える”“伝わる”まち」をビジョンに掲げ、未来を創る活動に取り組み始めています。試行錯誤を繰り返しながらもがいてきたこの 2 年、共に考え行動する姿勢は市民・町民の間に確実に広がり、これまでになかった人と人のつながりや新たな活動が次々と生まれています。地域は変わりつつあります。今やジオパークは萩になくてはならない存在になりました。

本年、再び日本ジオパークネットワーク正会員加盟を申請します。近代日本の夜明けを告げた明治維新の胎動の地である萩は、1 億年に及ぶ火成活動でつくられた、変動帯としての日本の一つの姿でもあります。私たちは、今再び社会に対して「日本で生きるとはどういうことか」を問いかけ、“変動帯に生きる日本の夜明け”を告げるべく全国の仲間と経験を共有し、共に考え続け、協働して社会の変革に取り組みます。

本申請書は、私たちのこれまでの活動の概略と、これからの確固たる決意を込めたものです。“維新とマグマの胎動の地”である萩にご期待ください。

萩ジオパーク構想推進協議会 会長

藤道 健二

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1. 申請地域について・・・・・・・・・・・・・・・・	4
1－1 申請地域の名称	4
1－2 地理的位置	5
1－3 地理的概要	5
1－4 組織、運営・事業計画、予算	10
2. 地質・地形遺産・・・・・・・・・・・・・・・・	16
2－1 申請地域の地質地形の概略	16
2－2 主要な「地質・地形サイト」の概略とその価値	19
2－3 主要な「地質・地形以外のサイト」の概略とその価値	25
2－4 各サイトの関連性と申請地域のテーマ	27
3. 地質・地形遺産の保全・・・・・・・・・・・・	29
3－1 地質・地形遺産の保全の方針	29
3－2 地質・地形遺産の保全の取り組み状況	29
3－3 地質・地形遺産の保全の課題と展望	30
4. 教育活動、研究活動・・・・・・・・・・・・	31
4－1 教育活動	31
4－2 研究活動	33
5. 地域の持続可能な発展・・・・・・・・・・・・	35
5－1 地域の持続可能な発展のための人材育成	35
5－2 地域経済活動	38
5－3 ジオツーリズムの可能性	42
5－4 地域住民の活動	44
6. 日本ジオパークに立候補する背景と理由・・・・・・・・	46

1. 申請地域について

1-1 申請地域の名称

萩ジオパーク ～マグマの胎動と人のいとなみが築いた城下町～



近代日本の夜明けを告げた明治維新。

これに関わる多くの志士たちを輩出した萩は、海・山の幸に恵まれ、中心地は城下町として栄えた歴史文化豊かな地域である。では、その繁栄を支えたものは何だろうか。

それは大地である。

萩のまちを支える大地は、その大部分がマグマの活動によってつくられた。1億年もの昔から地下でマグマがうごめき、たびたび地上に噴き出した。それは、日本列島の形成過程を象徴する活動でもある。萩の大地はそんな地球の記憶を私たちに語りかけてくれる。

萩の人々は、マグマの胎動が生んだ大地の恩恵を大いに受けて、土地に合った多様な産業を発展させた。周辺部の多くの村落から人や物が集まることで萩城下町は繁栄することができ、やがて維新を起こす原動力が生まれた。

維新とマグマの胎動の地である萩は、日本列島を形成した地球活動を記録した大地と向き合うことで、一大都市を築いた人々のいとなみを体感できる場所である。

明治維新から150年経った今、私たちは“大地と人の共生”を掲げ、ジオパーク活動によって現代日本に新しい風を送るべく立ち上がり、再び萩の地から維新を起こそうと考えている。その覚悟を込め、申請地域の名称を「萩ジオパーク」とする。

1-2 地理的位置

萩ジオパークで定める地域（山口県萩市、阿武町、および山口市阿東地域※）は、山口県の北東部に位置し、総面積は1107.3㎢で、山口県の面積の18.1%にあたる。北部は日本海に面し、東部は島根県（益田市、津和野町、吉賀町）と接し、南部は山口市、西部は長門市、美祢市（Mine 秋吉台ジオパーク）に接する。

※山口市阿東地域…旧阿東町のこと。阿東町は、かつて山口県北東部にあった町で阿武郡に属していたが、2010年1月16日に山口市に編入した。



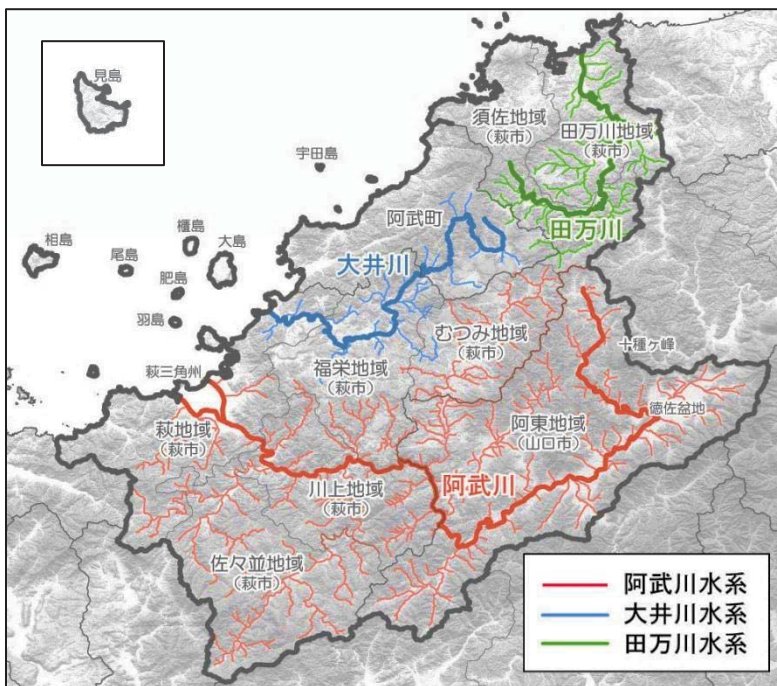
萩ジオパークの位置図

1-3 地理的概要

1-3-1 地勢、気候、生態系など

① 地勢

申請地域は全体として東部の中国山地から北西部の日本海へ向かう傾斜地で、南東部には十種ヶ峰（989.2m）をはじめ標高700mを超える山々が連なる。平地は少なく、阿武川河口部に形成された三角州にある萩市街地周辺及び阿東地域の徳佐盆地に見られ、丘陵地は、田万川地域から須佐地域にかけての臨海部に比較的なだらかに広がっている程度で、大半を山地が占めている。



萩ジオパークエリアの地形と主要な水系

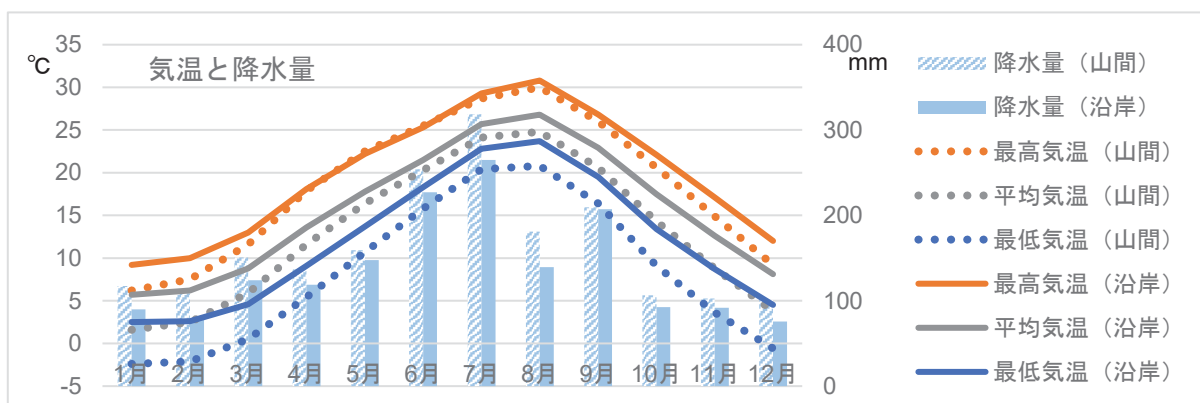
田万川地域と須佐地域の海岸は沈水地形を呈し、沖合には宇田島、大島、櫃島、肥島、羽島、尾島、相島の7つの平らな火山である島が点在し、約45km沖合には見島がある。そのうち大島、相島、櫃島、見島は有人島である。

河川は、南部の阿武川水系、中部の大井川水系、北部の田万川水系に大別される。阿武川は二級河川で、上流部は徳佐盆地を流れ河岸段丘を形成し、河口では萩市街地の広がる三角州により松本川と橋本川に分かれてい

る。阿武川、大井川ともに点在する火山により流れを変え、せき止め湖（埋積谷）がいくつも見られる。前回申請時（2016 年）からエリアを拡張して阿東地域全域を加えたことで、エリア全体を流域という視点で捉えることが可能になった。

② 気候

申請地域の沿岸部は、沖合いを流れる対馬海流やその海風の影響で、年の平均気温は 15℃程度と温暖である。冬季は北西の季節風の影響で曇天が多く、日照時間は少ないが、気温が高いため積雪は少ない。山間部は、年の平均気温は 13℃程度と低く、降水量は多い。積雪が比較的多く、山口市阿東地区では 1963 年の豪雪で 185cm の降雪を記録している。



当該地域の月別平均気温と降水量（統計期間 1981～2010 年）。

観測所在地・・・沿岸部：萩市土原、標高 2.2 m、山間部：山口市阿東徳佐中、標高 310 m。

③ 生態系

申請地域の自然植生はヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林域）であり、日本海沿岸部のやや土壌の厚い場所には、スダジイ、タブノキ群落が優占する。人間活動や自然災害により植生のほとんどは二次林（代償植生）となり、内陸部の多くは薪炭に用いられたアカマツ・コナラ林であったが、人の手が入らなくなった現在はコジイ・カシ群落に置き換えられつつある。国指定天然記念物の指月山^{しづきやま}は萩城内であったことからほとんど人の手が加わっておらず、極相林の様相を呈している。

標高 112m^{かさやま}の笠山山麓にある風穴周辺では冷温帯要素のホソイノデが自生し、暖地性のシダとの間に雑種を作り、また溶岩塊のすき間を縫ってできた海水の満ち干のある塩水地にはシバナをはじめとする好塩性植物が自生する。内陸部の火山がせき止めてできた湿地では、ミツガシワなどが見られ、花崗岩地帯の湿地ではモウセンゴケやサギソウなどが自生する。

申請地域は、温暖な気候と良好な自然環境に恵まれることから、温帯性の動物が豊富に生息している。哺乳類に関しては、中国山地の西端にあたることから、ニホンツキノワグマの生息が確認されているが、里山の荒廃に伴い、人家近くへ出没し、ニホンイノシシ、ニホンザルとともに獣害が問題視されている。中国や朝鮮半島とも近いことから、ユーラシア大陸からの鳥類の渡りの経路にもなっており、とくに日本海



見島のバードウォッチング

沖合いの見島は渡り鳥の主要な中継地の一つで、バードウォッチングの好適地となっている。



氷河期には海面低下により大陸とつながっていたと考えられ、比較的多くの大陸遺存種が見られる。例えば、北九州や山陰地方のほか、朝鮮半島やロシアの日本海に面する地域にだけ自生するダルマガクが申請地域内の一部の沿岸部に見られる。

ダルマガク

1-3-2 歴史、民俗など

申請地域である山口県萩市、阿武町、山口市阿東地域は、日本史における古代～近代の旧長門国阿武郡のエリアに合致する。古くは弥生時代から各時代の権力者が納める地方都市が発達し、大正時代以降は、全国でも早い段階から自然や文化財の保全と活用を展開してきた地域である。

阿武川上流の徳佐盆地（山口市阿東地域）では、弥生時代の土坑群や集落遺跡、古墳時代の古墳や集落遺跡が点在している。大井川下流の大井平野（萩市大井）にも、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡や古墳などが集中しており、この地域に勢力を持ったとされる阿武国造との関連があると考えられている。また田万川中流の下田万（萩市田万川）や、阿武川水系蔵目喜川流域の高佐（萩市むつみ）でも古墳が発見されている。さらに沖合いの見島には、奈良時代から平安時代にかけての防人の墓といわれる墳墓も群集している。



穴観音古墳（萩市むつみ）

平安時代、阿武郡には皇室領の阿武御領があったといわれており、鎌倉時代になると、阿武御領は後白河法皇の建立した長講堂の荘園となった。阿武郡から伐り出される木材は、「阿武の杣板」として世に知られ、平安時代の東大寺大仏殿再建用材の不足分は、阿武御領から調達された。南北朝・室町・安土桃山時代には、阿武郡は隣国の石見国（島根県）の豪族・益田氏と吉見氏の勢力争いの場となった。



萩城下町

慶長5年（1600年）の関ヶ原合戦後、長門と周防の2ヶ国（山口県）に領地を削減され萩に居城を定めた毛利氏が、江戸時代を通して阿武郡を支配することになった。毛利氏の居城と城下町は、萩三角州上に建設された。阿武郡は、町奉行が管轄する萩城下、城下近郊の村々で構成される当島宰判、さらに旧むつみ村、阿東町、田万川町、須佐町、阿武町の範囲を管轄する奥阿武宰判、萩三角州北東の港町や日本海上の島と沿岸の漁村で構成される浜崎宰判などに行政区分された。阿武郡内の農村・漁村・島々は、穀物や野菜、海産物などの食糧、あるいは薪炭などの燃料を萩城下へ供給する後背地として位置づけられた。

萩城下を中心とする阿武郡は日本海に面しており、幕末期には西洋列強の艦船が航行することがあった。そのため対外危機意識が強く醸成され、そのことを鋭敏にとらえた吉田松陰は松下村塾を主宰し、明治維新を成し遂げる多くの若い人材（高杉晋作、木戸孝允、伊藤博文など）を育てた。萩が明治維新胎動



松下村塾

の地と称される所以はここにある。明治以降、萩は城下町として政治・経済の中核的な役割を失ったが、阿武郡の郡役所は萩に置かれ、郡の一体的な政治・経済の発展が企図された。

大正 12 年（1923 年）、現在の山口市阿東地域に山口線、さらに昭和 8 年（1933 年）現在の萩市と阿武町の日本海に沿って山陰本線が全通した。軌を一にするように、阿武郡内に所在する景勝地の保全と観光開発が図られた。大正 9 年（1920 年）に長門峡保勝会が結成され、同 12 年に長門峡は国の名勝に指定された。須佐湾についても、当時の須佐町（現、萩市須佐）が中心となって須佐湾保勝会が結成され、昭和 3 年（1928 年）国の名勝および天然記念物の指定に至った。また、当時の奈古村（現、阿武町）でも奈古保勝会が結成され、奈古沖周辺の景勝地の宣伝活動がなされた。

1-3-3 社会、経済、人口、交通など

① 社会

本地域は、1879 年（明治 12 年）に萩町に役場を置く阿武郡としての行政区画に含まれて以来、自治体の変遷を経て、平成の大合併（平成 17 年）までは、萩市、阿武郡として社会的、経済的に結びつきの強いエリアを形成し、消防や廃棄物処理など様々な広域行政を展開してきた。現在も萩市、阿武町、山口市阿東地域と自治体は異なるものの、地域内の住民の暮らしや農林水産業をはじめとする産業において、これまでの結びつきの背景は息づいている。

② 経済

2013 年度の 1 人当たり国民所得（経済活動で生産され分配された付加価値の総額を人口で除したもの）が 284 万 5 千円であるのに対し、申請地域の 1 人当たり市町民所得は 215 万 1 千円である。これは山口県下でも低い水準にあり、製造業が中小・零細企業中心になっていることと、第一次産業比率が比較的高い水準にあること等に起因する。

申請地域は、萩市を中心として城下町のたたずまいや明治維新に関する史跡などの歴史的環境や自然環境など文化遺産が数多く残り、昭和初期から観光産業により支えられてきた。戦前期の歴史遊覧から始まった観光は、高度経済成長期を迎えた日本において、原風景を求める旅行が盛んとなった時期には、女性誌などにも取り上げられ、多くの観光客が訪れたが、山陽新幹線が開通した昭和 50 年をピークにその後減少傾向となった。

中山間地域に目を向けると農林水産業を連携させたまちづくりを進めており、6 次産業化による生產品のブランド化、地産池消の取組み等が活発化したほか、グリーン・ツーリズム等の協議会が立ち上がり、民泊や体験型修学旅行の受け入れによる交流人口の拡大を見せている。

萩市の観光客数は、年間約 220 万～240 万人の間での推移で、その内の約 90%が県外客である。ただし、2015 年には NHK 大河ドラマ「花燃ゆ」や世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」登録の効果もあり、一時的に爆発的な増加がみとめられた。

申請地域の観光客数の推移（人）

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
全域	2,990,276	2,814,971	3,107,542	3,898,413	3,279,852	3,238,569
萩市	2,334,062	2,185,423	2,301,054	3,065,999	2,417,406	2,420,041
阿武町	198,235	193,081	325,744	369,396	431,440	430,089
山口市阿東	457,979	436,467	480,744	463,018	431,006	388,439

③ 人口

申請地域の人口は、2015年の国勢調査では58,806人、世帯数は25,577世帯である。人口はピーク時の昭和30年の129,150人から減少傾向が続いている。1世帯当たりの人員も減少が続く、核家族化や一人暮らしの高齢者が増加している。申請地域のすべてが過疎地域自立促進特別措置法（平成12年法律第15号）第2条の過疎地域に指定されている。萩市の人口ビジョン（2015年）では、人口は2040年には38,584人（2015年比で63.44%）にまで減少すると推測されており、人口減少への対応が急がれている。

④ 交通

大都市圏や九州・広島県方面からの申請地域へのアクセス手段としては、鉄道、飛行機及び自動車の利用がある。鉄道では新山口駅が最寄りの主要駅であり、JR山陽新幹線の停車駅となっている。空路では、山口宇部空港及び萩・石見空港の利用が一般的である。これら主要駅から本構想内のエリアへは、路線バスやJR山陰本線、JR山口線の利用のほか、レンタカーの利用が可能である。また、自家用車によるアクセスでは、中国自動車道から美祢東JCTを経て小郡萩道路を經由し、国道262号線をたどることになる。

申請地域内の鉄道網としてはJR山陰本線やJR山口線がある。それぞれ地域内の運行本数は多くないものの、JR山陰本線東萩駅、萩駅は、JR西日本の運行する豪華寝台列車「瑞風」の停車駅（立寄観光用）となっているほか、JR山口線には、冬季を除く休日にはSLやまぐち号が運行されており観光資源の一つとなっている。



萩ジオパークへのアクセス

1-4 組織、運営・事業計画、予算

1-4-1 これまでの活動の経緯

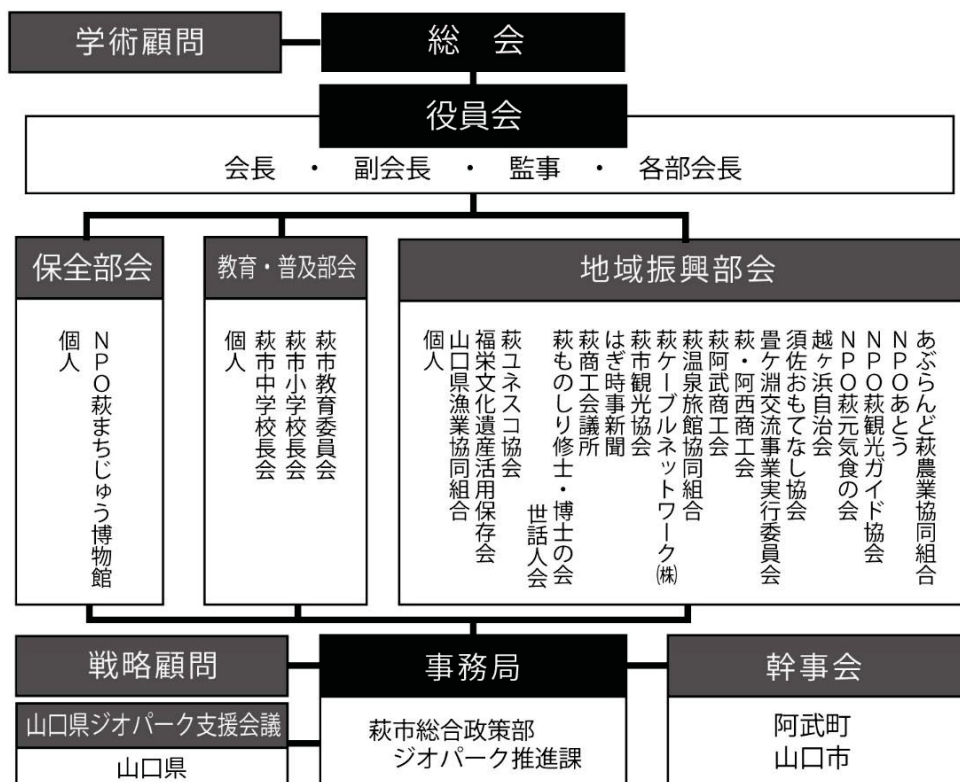
年月日	できごと
2014 年 4 月 1 日	萩市として日本ジオパーク認定に向けた取組みを開始。
9 月 24 日	萩博物館に地学専門員（非常勤特別職）を置く。
10 月 10 日	日本ジオパークネットワークに準会員として加盟。
	萩市総合政策部企画政策課にジオパーク推進室を設置。
2015 年 4 月 30 日	萩ジオパーク構想推進協議会設立総会を開催。 協議会によるジオパーク活動が展開することとなる。
2016 年 3 月 22 日	萩ジオパーク構想推進協議会臨時総会において、日本ジオパークネットワークに対し正会員加盟申請を行う方針を決定。 山口市、阿武町がオブザーバーとして参加。
4 月 1 日	ジオパーク推進室からジオパーク推進課に昇格し、萩市まちじゅう博物館推進部に設置。
4 月 14 日	日本ジオパークネットワークに対し、正会員加盟（日本ジオパーク認定）申請書を提出。
5 月 21 日	日本ジオパーク委員会新規認定申請地域プレゼンテーション（千葉県千葉市）に参加。
8 月 7～9 日	日本ジオパーク委員会による新規認定の現地審査。
9 月 9 日	第 28 回日本ジオパーク委員会開催。認定見送り。
2017 年 3 月 4 日	萩・明倫学舎本館に萩ジオパークビジターセンターをオープン。
4 月 1 日	萩市ジオパーク推進課（萩ジオパーク構想推進協議会事務局）内に専門員を配置。
4 月 10 日	萩ジオパーク構想推進協議会定例総会において、山口市および阿武町の正会員参加を決定。
7 月 9 日	萩ジオパーク構想推進協議会臨時総会において、戦略顧問を置くこと等の規約改正を議決。
8 月 1 日	日本ジオパーク認定の実現に向け、ジオパーク推進課を萩市総務企画部内に移設。
9 月 26 日	「萩ジオマスター講座」を開講（全 12 回）し、市民を対象としたジオパーク活動に携わる人材の育成を開始。
12 月 28 日	萩ジオパーク構想基本計画・行動計画を策定。
2018 年 1 月 24 日	山口大学と萩市の包括連携協定を締結。
2 月 1 日	萩市ジオパーク推進課内に新たに事務職員 1 名を増員。
3 月 26 日	萩ジオパーク構想推進協議会臨時総会において、日本ジオパークネットワークに対し正会員加盟申請を行う方針を決定。

1-4-2 組織

① 萩ジオパーク構想推進協議会

萩ジオパーク構想推進協議会（以下、協議会）は、ジオサイトの保全並びに教育及び地域振興における活用を図るジオパーク活動を推進する母体として、2015年4月に結成した。地域が活性化し潤う仕組みをつくり、持続可能な発展を目指すことを目的としている。

2市1町（萩市、山口市、阿武町）の行政機関や商工・農水の振興団体、市民ガイド活動団体等が協議会に参画している。これらの団体が協働し、ジオパーク活動の活性化と地域の魅力発信を行い、ジオパークとしてのまちづくりの実現を目指している。



萩ジオパーク構想推進協議会の組織図

● 戦略顧問～ジオパーク活動推進の戦略面のサポート体制～

本協議会内にジオパーク構想の指導助言機関として戦略顧問を置いている。事務局は月に1回程度の頻度で戦略顧問を招いて戦略会議を開催し、指導や助言を受けながらジオパーク活動を戦略的かつ挑戦的に推進している。

柚洞一央（鳥取環境大学准教授、日本ジオパークネットワーク運営会議委員）

脇田浩二（山口大学教授、元 日本ジオパーク委員会 副事務局長）

● 部会～地域の声进行にする仕組み～

協議会内には、3つの部会（保全部会、教育・普及部会、地域振興部会）を設置している。この部会は、地域の声进行にするため協議会内で合意形成を図り、具体的な事業に落とし込んで地域のジオパーク活動に反映している。各部会の活動は次の通りである。

教育・普及部会

ジオパーク関連施設の展示資料等の作成、小中学校での使用教材の作成支援、公民館等への出前講座などを実施している。

地域振興部会

ガイドの養成、ジオツアーの商品化検討、地域会議の開催、各地域のジオパーク活動の掘り起こし、地域のネットワーク構築などを行う。

保全部会

ジオサイトの保全の方針決定、ジオサイトの保全に関する地域住民との連携などを行う。

● 地域会議～地域住民の意見反映の仕組み～

萩ジオパーク構想の実現と持続的な活動の主体は地域住民である。住民の思いや意見を集約するため、「地域会議」を定期的に開催し、地域が抱える課題など意見を聴取している。地域会議は、平成の大合併前の萩市旧市町村単位（1市2町4村）をベースに2016年より実施しており、聴取した意見を萩ジオパーク構想基本計画・実行計画に反映した。

また、地域住民主導の事業展開を図るため、地域の意見が事業化・予算化され地域に還元されていく仕組みの構築を検討している。このように、各地域の主体的な取組みを地域間相互に情報交換・共有する環境を整え、ジオパーク活動全体のベースアップを図っている。

② 科学面のサポート体制

本協議会は、山口大学理学部・徳山大学経済学部(鳥取環境大学)等の研究者、市・萩博物館等の学芸員及び専門員、学校教諭、民間の研究者等により、科学面のサポートを受けている。

● 学術顧問

本協議会内にジオパーク構想の指導助言機関として学術顧問を置き、各専門分野に精通する以下の研究者等からジオサイトの学術的価値付けおよびジオサイトの保全に関する指導及び助言を受けている。

角縁 進（佐賀大学教育学部教授、阿武火山群研究者）
金折裕司（元山口大学大学院理工学研究科教授、山口地学会）
清杉孝司（神戸大学理学部特任助教、阿武火山群研究者）
鶴谷 保（山口県立宇部高等学校教諭、萩市文化財審議会審議委員、山口生物学会）
原田憲一（至誠館大学 前学長）
原田進造（萩市史執筆者、山口地学会）
火除 崇（阿武町立阿武中学校教諭、川上村史執筆者、山口地学会副会長）

● ジオパーク専門員の雇用

2017年4月からジオパーク専門員として、ユネスコ世界ジオパーク（室戸）の専門員経験者を即戦力として配置した。ジオパークにおける専門員は最重要人材と考え、活動に専念できる環境として萩市役所の正職員のポストを新たに用意した。これにより、専門員は長期ビジョンを描いて計画的かつ挑戦的に事業を展開することができ、それに伴って申請地域における学術連携、教育、地域振興に関わる人材育成などあらゆる分野のジオパーク活動が加速度的に前進した。

● 山口大学との連携体制

2018年1月24日、萩市は山口大学との包括連携協定を締結した。

萩ジオパーク構想の推進においては、山口大学理学部地球圏システム科学科等の学生の申請地域内でのフィールドワークによる地球科学分野をはじめとした研究活動の活発化とともに、学術的支援等、連携した取組みを行うこととした。現在、山口大学の学生約30名が域内で進級論文のための実習を実施し、2018年度から卒業研究も実施される。

● 萩ジオマスター講座等での講演

2017 年 9 月から、萩の大地と人のつながりを楽しめる人を養成するという目的で、全 12 回の講座を設けた「萩ジオマスター講座」を実施した。各講座では、萩の大地の成り立ちというテーマで、白亜紀の火成活動や阿武単成火山群などの講義と現地見学を行い、講師に山口大学の脇田浩二教授および今岡照喜教授、佐賀大学の角縁進教授、神戸大学の清杉孝司特任助教等、多岐にわたる専門分野の先生方に協力いただいた。

③ 拠点施設

● 萩ジオパークビジターセンター



萩市は、2017 年 3 月に市の中心部にある旧明倫小学校をリノベーションし開館した「萩・明倫学舎」に萩ジオパークビジターセンターを拠点施設として設置した。展示は、萩の大地の成り立ち等を解説するプロジェクションマッピングや萩のジオストーリーを紹介するパネルのほか、五感を使って楽しむハンズオン展示を実施している。

開館からわずか 11 ヶ月（2018 年 2 月時点）で来館者数 30 万人を突破し、多くの来訪者に楽しまれている。現在の活動に加えて、今後、ジオパーク的につながる食の提供や体験型学習、ツアーコースの紹介など、ビジターセンターから各サイト等への誘導につながる活動を実施していく予定である。



● 道の駅、博物館などのサテライト展示

申請地域内最大の社会教育施設であり、かつ、萩観光の拠点ともなっている萩博物館においては、2016 年より萩ジオパーク構想の取り組みや見どころを紹介するパネル展示をエントランスロビーの一角を借り、実施している。また、構想地域内 7 箇所にある「道の駅」等の各地域の情報発信拠点施設に、最寄りのジオサイト等の紹介パネルを設置している。



1-4-3 運営・事業計画

① 運営・事業計画の策定プロセス

2017 年 12 月、協議会において「萩ジオパーク構想基本計画・実行計画」を策定した。これは、ジオパーク活動を推進する上で目指すべき将来像とそれを実現するための活動の目標を掲げたものである。協議会の会員はもとより地域住民と共有することによって、ジオパークによるまちづくりの新たな指針とするものである。なお、本計画の抄録版を 2018 年 2 月申請地域内の全戸に配布した。

② 基本計画

②-1 将来像（ビジョン）

「地球の視点で萩らしさが“見える”“伝わる”まちづくり」

私たちはジオパークの活動を通じて、萩で繰り広げられてきた大地と人の共生の姿を地球活動の一部として捉えなおし、萩らしさを根源から理解した新たな価値観を創造したいと考えている。萩には先人から引き継いだ萩らしい歴史や文化があり、私たちはその保全に力を注いできた。見方を変えると、萩の大地の地質・地形に適した暮らしを模索してきた地域の人々の試行錯誤の記憶が失われることなく残っているということである。私たちは、萩のまちを地球活動の一部として包括的に捉え、大地の特徴に適した持続可能な発展を目指して、未来の世代に萩の自然と歴史を引き継ぐことを使命と考えている。

②-2 活動の目標

- 地球目線で萩を「知る」（調査・研究、普及啓発・探求の取り組み）

～萩らしさとは何かを認識しよう～

この地に暮らす誰もが土地の成り立ちと関係を語ることができるまちにする。

- 地球目線で萩を「守る」（保全活動の推進）

～萩らしさを磨き、輝き続けるふるさとを残していこう～

ジオサイトを正しく守り続ける仕組みをつくっていく。地域住民と共に日常的に保全に関わり、未来へ伝えていけるまちにする。

- 地球目線で萩を「創る」（産業振興・地域おこし）

～萩らしさは私たちが創る～

このまちの至るところでジオツアーが定番化し、そこに新たな雇用が生まれる環境をつくる。

- 地球目線で萩を「伝える」（教育、観光振興）

～萩らしさを表現しよう～

「見る」「遊ぶ」「食べる」の全てで大地と人のつながりを感じられるまちを創造する。

- 地球目線で萩を「つなげる」まちへ（ネットワーク連携）

～「大地と人」「人と人」「地域と地域」がつながる場を創ろう。「過去と現在、そして未来」がつながる活動をしよう～

ジオパーク内で横のつながりが生まれ、地域間の交流が活発化するまちをつくり、ジオパーク間のネットワークが広がる活動を展開する。

③ 実行計画

基本計画で定めた萩ジオパークの将来像を確実かつ計画的に実施するために、活動目標の5項目に対し、以下の短期的な目標（2021年を目途）を定め、実現に向けた具体的な取り組みを行う。

「知る」…ジオパークの教育に携わる人材の育成とその仕組みを完成させる

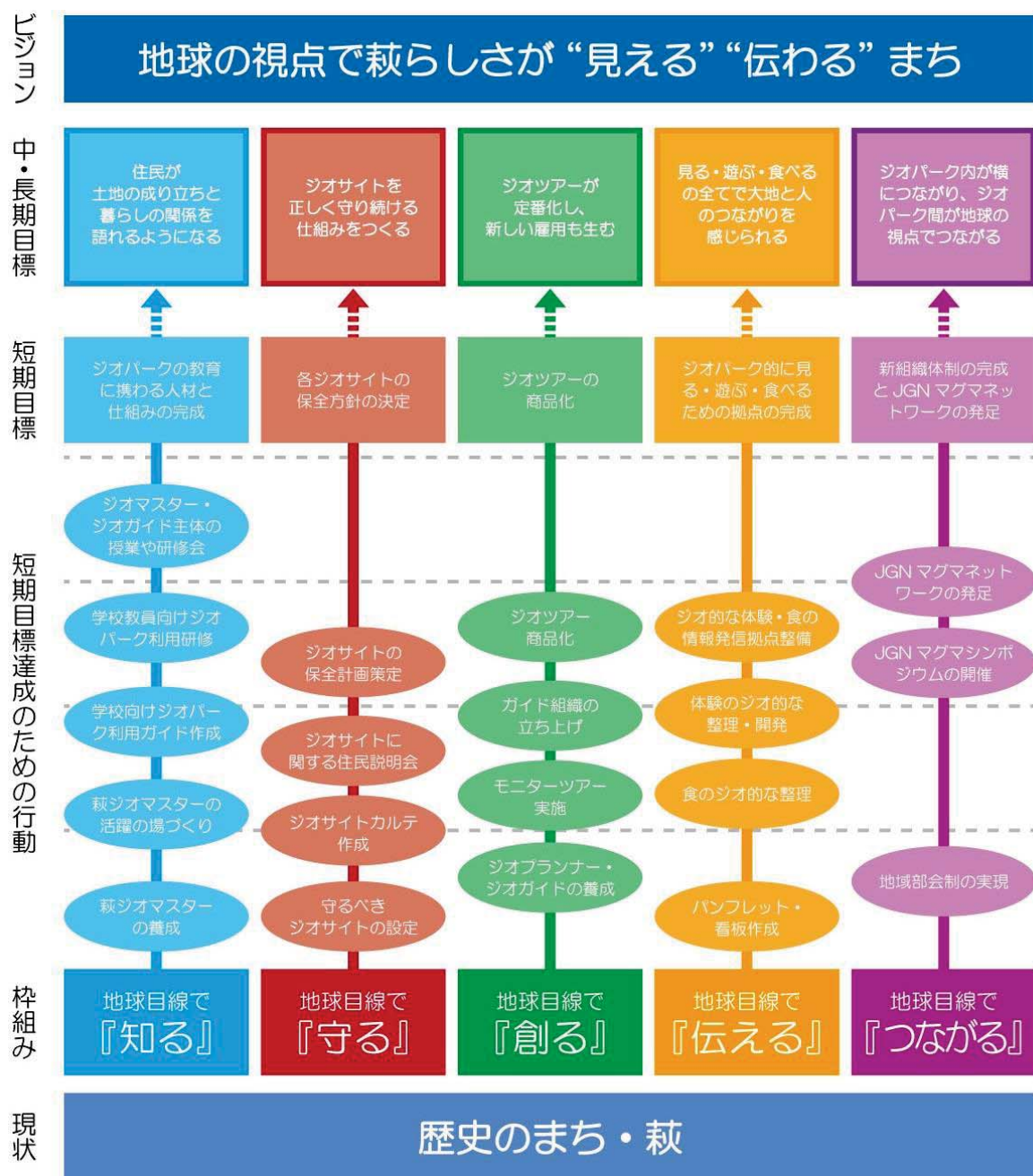
「守る」…各ジオサイトの保全方針を決定する

「創る」…ジオツアーを商品化する

「伝える」…ジオパークを「見る」「遊ぶ」「食べる」ための拠点を完成させる

「つなげる」…地域内がつながる新たな組織体制の完成とJGNマグマネットワークを発足させる

また、上記の目標に対し、4年を目処とした短期的かつ具体的な行動を以下のとおり設定した。
今後、4年ごとに実行計画を見直していくこととしている。



萩ジオパーク構想のビジョンと実行計画

1-4 予算

協議会は2015年4月に発足し、初年度予算600万円を萩市から補助金の交付を受けて活動を開始した。2016年度は1,300万円、2017年度は1,612万円、そして、2018年度は1,799万円とジオパーク活動が活発化するにつれて予算額も純増している。また、ジオツアーの商品化、オリジナルグッズ販売など自主財源の確保も検討していくが、まずは、地に足のついたジオパーク活動を行い、来訪者に快く消費してもらうツーリズム商品の提供を目指していく。

2. 地質・地形遺産

2-1 申請地域の地質地形の概略

2-1-1 申請地域の地質

申請地域は、ペルム紀からジュラ紀の付加体を基盤とし、過去 1 億年間にわたるプレート境界の多様な火成活動の変遷をたどることができる。日本列島が経験した最初から現在までの火成活動を連続的に追うことができる点で、日本で唯一のジオパークである。

● 巨大プレートの沈み込みに伴う火山―深成活動（後期白亜紀～古第三紀）

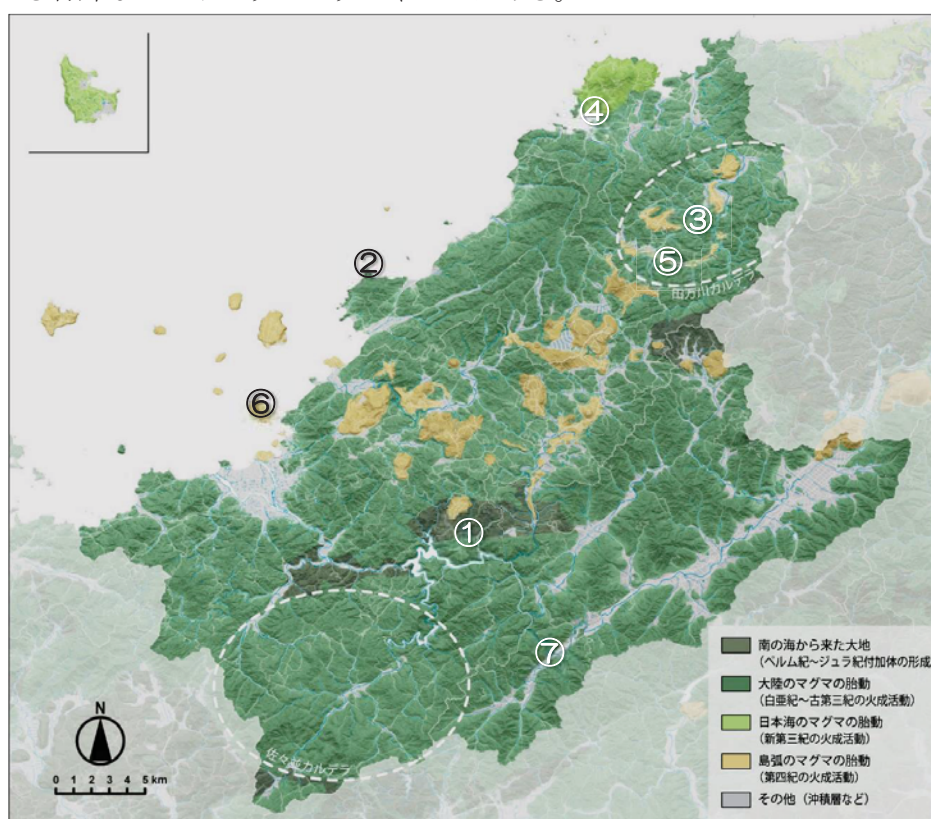
後期白亜紀～古第三紀の巨大高速プレート（太平洋プレート）の沈み込みに伴う大規模火成活動による火成岩類が申請地域の大部分を占める。

● 日本海（背弧）形成に伴う海底火山活動（新第三紀）

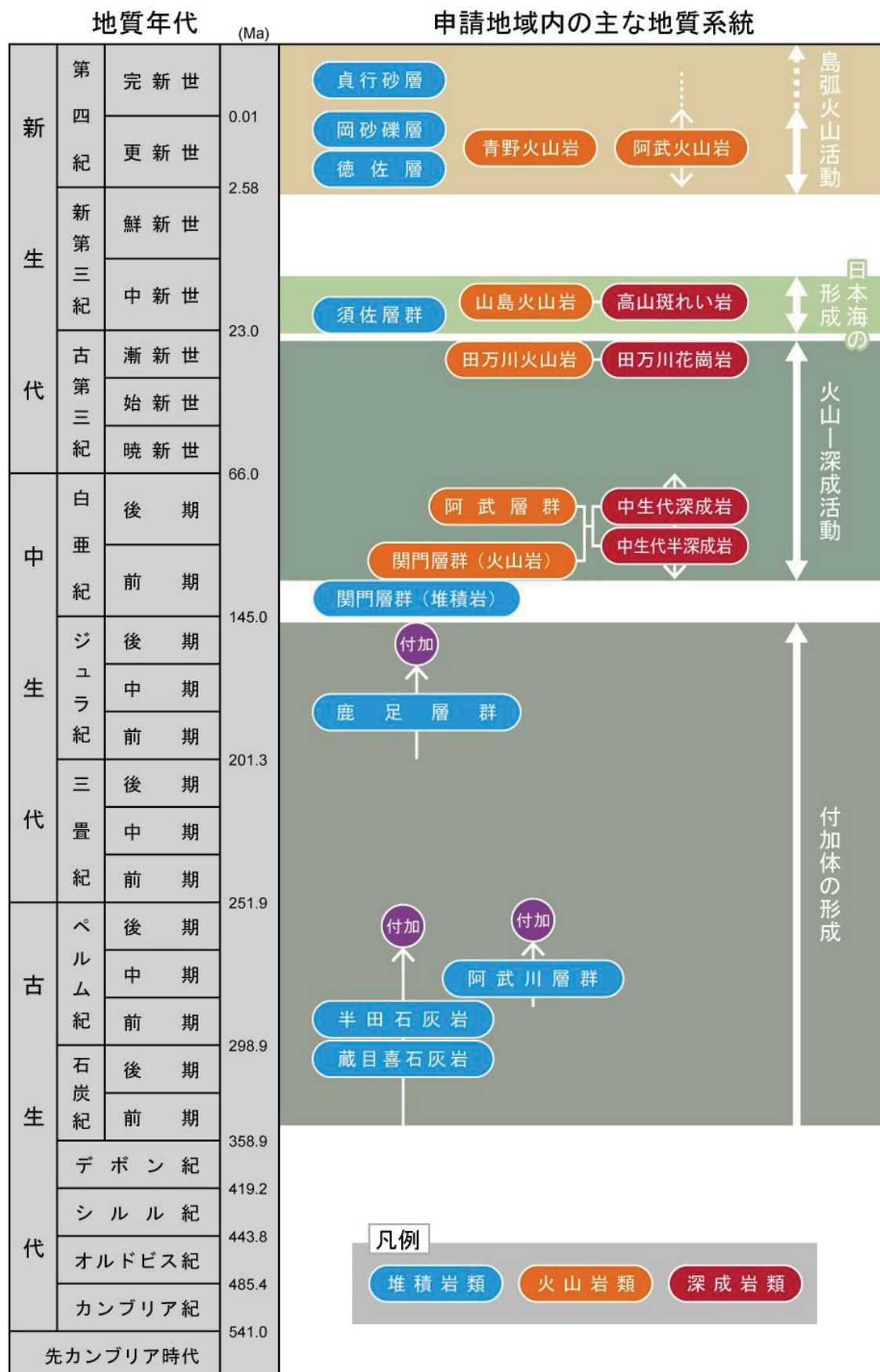
北端部と沖合の見島には新第三紀の日本海拡大期（背弧形成）に伴う海底火山活動による火成岩類が分布する。

● フィリピン海プレートの沈み込みに伴う単成火山群の活動（第四紀）

中央部には、フィリピン海プレートの沈み込みに伴う第四紀島弧火山である阿武火山群および青野火山群の二つの単成火山群の火山岩が広範囲に点在する。阿武火山群は、日本で 111 ある活火山（2018 年 4 月現在）の中で静岡県伊豆半島、長崎県福江の阿武火山群と並んで 3 箇所しかない単成火山群である。また現在、阿武火山群の直下にはフィリピン海プレートが欠如している特殊なテクトニックセッティングにある。



萩ジオパークの地質概略図（①～⑦は 2-2 主要な「地質・地形サイト」に対応）



申請地域内の主要な地質系統

📍 2-1-2 申請地域の地形

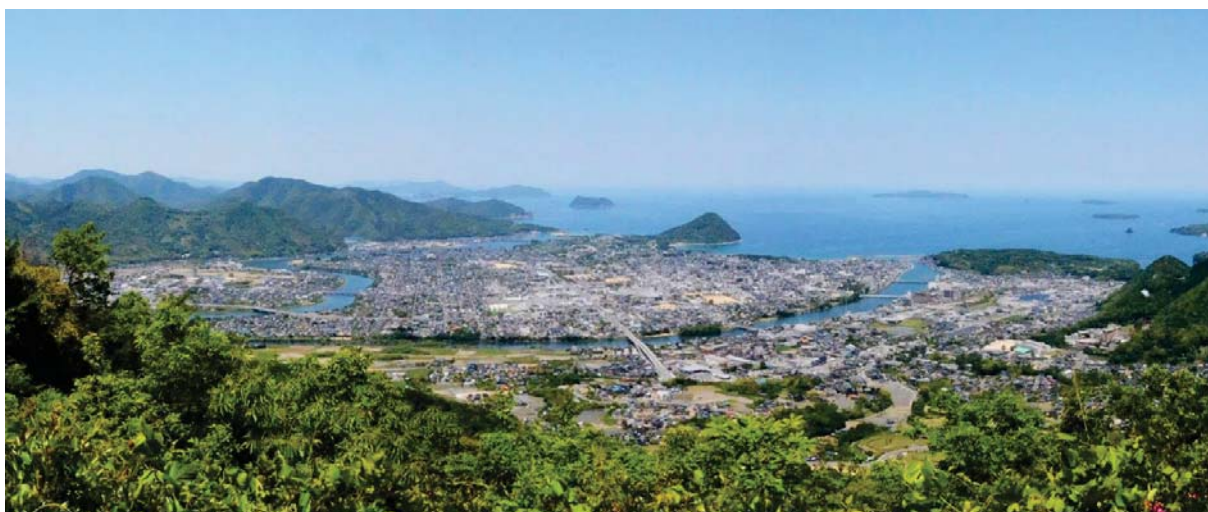
申請地域は、第四紀以降の火山活動によって形成された地形で特徴づけられ、中起伏山地と交錯しながら小起伏山地や丘陵地（起伏量 200m 以下）が広がり、南西方向と北東方向に河川が発達している。

海と陸にまたがり東西 40 km×南北 25 km 四方の区域に分布する阿武火山群は、約 50 の小規模な溶岩台地（溶岩平頂丘）およびスコリア丘を形成している。



阿武火山群の特徴である溶岩平頂丘がわかりやすい萩六島の景色（笠山山頂より）

青野火山群の噴火によって形成されたせき止め湖（古徳佐湖）は、湖水の流出によって河岸段丘を伴う盆地（徳佐盆地）となっている。また、徳佐盆地から日本海に注ぐ阿武川は、河口付近に三角州を形成し、山陰地域では少ない沿岸域の平野となっている。



阿武川が形成した萩三角州（田床山山頂より）

📍 2-1-3 Mine 秋吉台ジオパークとの関連性

申請地域は、隣接する Mine 秋吉台ジオパークと地質学的に深い関係がある。萩ジオパークの基盤であるペルム紀～ジュラ紀の付加体は、Mine 秋吉台ジオパークの広範囲に分布する秋吉台石灰岩層などと同様の形成発達過程をたどったと考えられている。Mine 秋吉台ジオパークは“日本列島の骨格を形成した地球の記憶”、萩ジオパークはそれに続く“日本列島が経験してきた多様な火成活動の記憶”をメインテーマにすえており、この 2 地域の地質に触れることで、プレート境界で日本列島が形成された歴史の概略を理解することができる。このことからジオパーク活動においても学習会をお互いに受け入れあったり、シンポジウム等の巡検を共同で開催したりといった連携を進めている。

2-2 主要な「地質・地形サイト」の概略とその価値

① ^{はんだ}半田石灰岩 | ペルム紀付加体

萩の大地の基盤が遙か南の海から移動してきたことを知ることができる。

半田地区には標高 200～300m に面積数 km² 規模の石灰岩が露出している。灰白色で塊状無層理の石灰岩でフズリナ化石を多く産する。これらの化石は上部石炭系から中部ペルム系を示し、Mine 秋吉台ジオパークの秋吉石灰岩層群に対比される。秋吉石灰岩層群と同様の形成発達過程をたどったと考えられ、海山—生物礁複合体のプレート収束帯での沈み込みで形成された付加体である。



道路沿いに露出する半田石灰岩

② モドロ岬とその周辺 | 白亜紀火成活動の地下断面

後期白亜紀に大陸東縁で大規模噴火活動を起こしたマグマの地下断面を見ることができる。



モドロ岬を海上から見学している様子

阿武町の^{きよと}木与から^{うた}宇田にかけての沿岸地域に花崗岩が分布するが、そのうちモドロ岬周辺部では海上から高さ 20～50m 東西約 4km にわたる大規模な露頭を望むことができる。大陸の陸上で形成された堆積岩および火山岩（関門層群）を花崗岩が貫いていることがよくわかる。

モドロ岬では大小さまざまな水玉模様（苦鉄質火成包有岩、MME=Mafic Magmatic Enclave）が見られ、地下深くにおいて花崗岩と閃緑岩のマグマ混交が行われていたことがわかる。約 1km 南

東のウツリでは MME を含む花崗岩（深成岩）の上に流紋岩（火山岩）が接触して分布しており、まさに巨大火山活動の地下断面が目の前に広がっている。

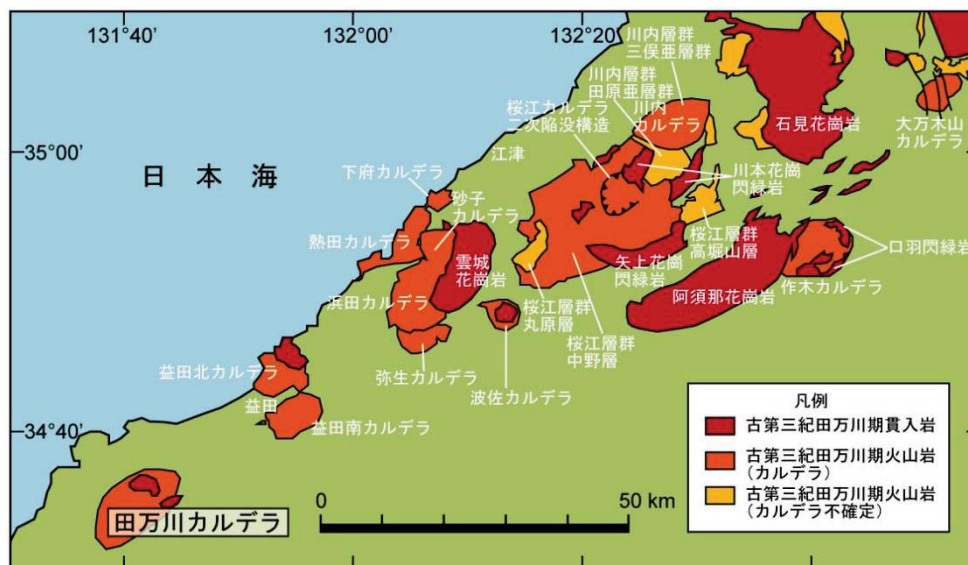


ウツリ付近で見られる花崗岩と流紋岩の境界

③ 田万川カルデラ | 古第三紀カルデラ群の最初の発見

古第三紀に大陸東縁で次々と形成されたカルデラの姿を知ることができる。

田万川カルデラは、山口・島根県境付近から島根県中央部にかけて分布する古第三紀カルデラ群の中で最初に発見されたカルデラである。申請地域の北部に位置し北東―南西方向にのびる長径 14km、短径 7km の楕円状の輪郭をしている。侵食により明瞭なカルデラ地形はないが、安山岩と流紋岩質凝灰岩（火砕流堆積物）からなる火山岩と、同質の花崗岩が各所に見られ火山―深成岩複合岩体を形成しているほか、温泉作用で変質した岩石など一大地熱地帯の痕跡も見られる。



山陰西部地域における田万川カルデラを含む古第三紀カルデラの分布（今岡・小室，2009）

④ 高山と須佐湾 | 日本海拡大に伴う堆積作用と海底火山活動

約 2000 万年前～1500 万年前の間に起きた日本海の形成時に、当時の海底で起こっていた火成活動に触れることができる。

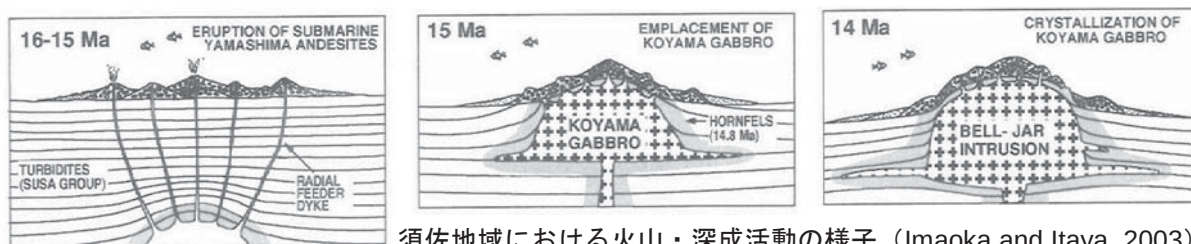


須佐湾遊覧船からみた豊岩（須佐層群）と高山（斑れい岩体）

本ジオサイトは、山口県内の観光地としての知名度が高い一方で、日本海形成に伴う堆積作用および火成作用の一連の流れを追えるため、大学の地学巡検のフィールドとしても広く活用されている。

申請地域北部に位置する須佐湾周辺の沿岸地域には背弧海盆に堆積した浅海成層（須佐層群）が分布している。須佐層群は下部から上部にいくにつれて堆積環境が内湾から外海へと変化しており、日本海が徐々に深くなっていたことを示唆している。

高さ 533m の高山は須佐層群を貫いた釣鐘状の斑れい岩体で、付近に分布する玄武岩質安山岩—安山岩（山島火山岩）と火山—深成複合岩体を形成している。高山斑れい岩と須佐層群の接触部はホルンフェルス化している。



須佐地域における火山・深成活動の様子 (Imaoka and Itaya, 2003)



屏風岩などの沿岸部の断崖では須佐層群や阿武層群（白亜紀凝灰岩層）を垂直に貫くドレライト岩脈が見られ、遊覧船を利用して海上から望むと日本海拡大期の海底下で起きていた激しい火成活動を感じることができる。

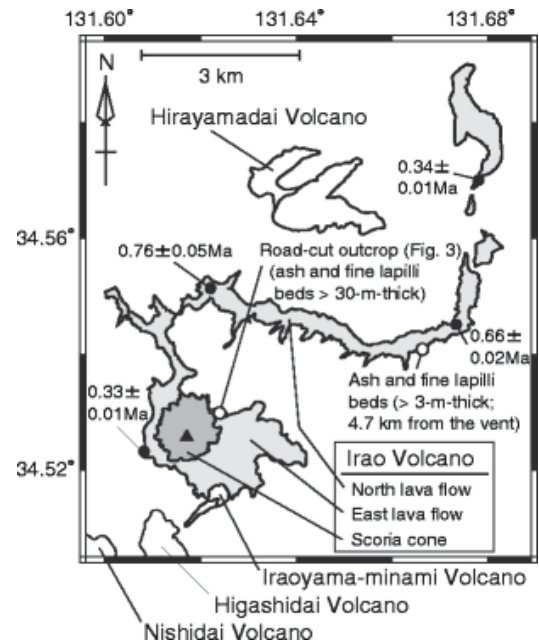
阿武層群を貫くドレライト岩脈（屏風岩付近）

⑤ ^{いらお}伊良尾山とその周辺 | 第四紀単成火山の断面と溶岩流

日本列島が現在の配置になったのちの島弧における火山活動の断面を覗くことができる。

第四紀の単成火山群・阿武火山群の中で最も激しく噴火をしたという伊良尾山は、その火山灰層や 14km

に渡って流れた溶岩流の足跡をたどることができる。
農道工事の際に出現した大規模露頭は、伊良尾山がスコリア丘を形成してから溶岩の流出をともなって崩壊し、さらに溶岩流を流出しつつスコリア丘を再形成したという一連の形成過程をたどることができ、阿武火山群の噴火様式の一つの詳細が解明された。現在は「イラオ火山灰層観察施設」として露頭の一部を保存している。



イラオ火山とその溶岩流の分布
(Kiyosugi, 2014)

イラオ火山灰層観察施設

伊良尾山の玄武岩質溶岩は谷筋に沿って約 14km 流れくだった。冷え固まる際に形成された柱状節理を観察できるジオサイトが田万川沿いに点在し、地元に龍にまつわる伝承・地名があることから「龍が通った道」と呼ばれて住民に親しまれている。



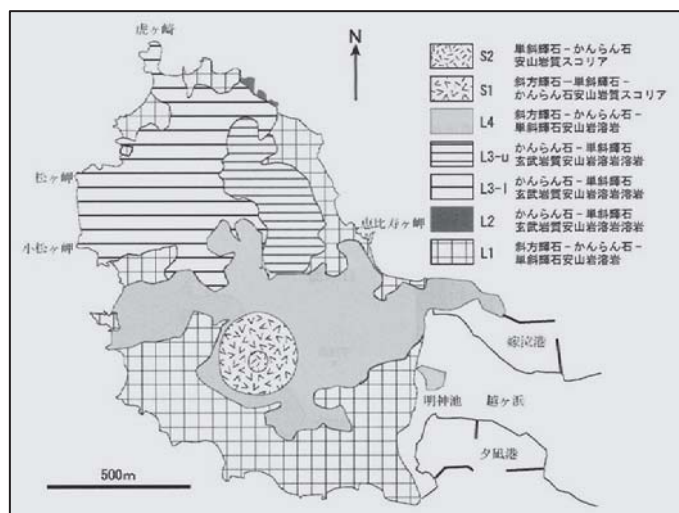
左) 柱状節理と田万川による侵食前線が見られる^{たためがふち}畳ヶ淵

右) 溶岩流の終点である溶岩湖の断面を見ることができる^{りゅうりんきょう}龍鱗郷

⑥ 笠山 | 第四紀単成火山の溶岩流とスコリア丘

阿武火山群の特徴である安山岩質の溶岩台地の形成過程や、通常の火山では保存されにくいスコリア丘の形成過程を知ることができる。

萩市越ヶ浜にある笠山は、約 1 万年前に噴火した阿武火山群の中で最も新しい火山で、玄武岩質安山岩～安山岩の溶岩台地とスコリア丘で構成されている。



笠山の地質図

沿岸部には溶岩台地が広がり、溶岩堤防や溶岩流の表面と内部の構造を間近で観察することができる。山頂には、溶岩台地の上部に形成されたスコリア丘の火口が保存されており、内部構造を観察することができる。スコリア層が約 30° で外側に傾斜しており、何枚かの降下ユニットがみられる。



左) 沿岸部の溶岩台地を見学する様子、右) 沿岸部でよく見られるアア溶岩 (玄武岩質安山岩)



左) スコリア丘の火口内を見学する様子、右) 約 30° に傾斜するスコリア層

第四紀単成火山による湖の形成と、それが河川争奪によって決壊し、日本海沿岸に三角州を形成するまでに至った過程を知ることができる。

数十万年前、内陸部で東北方向に流れて現在の益田市から日本海に注いでいた篠目川が、第四紀単成火山である青野火山群（野坂山や青野山）の噴火によってせき止められて古徳佐湖が出現した。その後、河川争奪によって篠目川は阿武川に下流域を奪われ、現在の長門峡入口付近から北流するようになり、それに伴って古徳佐湖は姿を消し、徳佐盆地となった。阿武川は後期白亜紀の溶結凝灰岩層を削り込んで溪谷（長門峡）を形成し、下流域には萩三角州を形成した。

徳佐盆地の北東端では広い水田地越しに青野火山群の溶岩ドームが複数立ち並ぶ光景を見ることができ、長門峡入口付近では「丁字の出会い淵（ぶち）」と呼ばれる河川争奪の現場を見ることができる。

徳佐盆地と青野山火山群の溶岩ドーム



長門峡



河川争奪の現場である丁字の出会い淵

2-3 主要な「地質・地形以外のサイト」の概略とその価値

2-3-1 生態学的サイト

① ベニゴマオカタニシ生息地 | 石灰岩とカタツムリ

ペルム紀付加体の半田石灰岩が生んだ特有の生態系に触れることができる。

ベニゴマオカタニシは殻高約 2.5 mm、殻径約 2.2 mm の赤紅色の微小巻き貝で、生息場所は石灰岩表面に限られる。石灰岩の表面に数十個体が群れを作り、雨水の侵食によってできた空洞などで乾燥から身を守る。石灰岩表面の藻類や菌類を食餌とし、貝殻の材料であるカルシウムを補給している。森林の開発や伐採による林内の乾燥の進行で生息に影響が出始めており、準絶滅危惧種（山口県）に分類されている。



ベニゴマオカタニシ

② 笠山 | 溶岩流が生んだ海水と淡水、寒と暖が混在する特異な生態系

笠山の溶岩の崩壊によって形成された汽水湖群と風穴群が生んだ特異な生態系に触れることができる。

海に面する笠山では、溶岩の隙間を通して海水が流れ込む池が点在しており、海岸から離れた場所にシバナ等の好塩性植物が生育している。また、崩壊した溶岩のブロックの隙間から冷気が噴き出す風穴も無数に存在する。風穴周辺は真夏でも気温が 15℃程度で、ホソイノ



汽水湖の湖畔に生えるシバナ

デ、コタニワタリ等の寒地性植物が生育している。風穴付近以外の場所には温暖な海岸性気候のために暖地性植物が生育しているため、寒地性と暖地性が混在する特異な植生が形成されている。

③ ハンノキ群生地 | 古徳佐湖（せき止め湖）の名残の湿原

徳佐盆地に点在する湿地を象徴する生態系に触れることができる。

ハンノキは湿原や沼地のような過湿地に森林を形成する数少ない樹木で、湿原のような貧栄養環境でも高木として生長できる。徳佐盆地にはハンノキが群生する湿地が点在している。これらの湿原には、カスミサンショウウオ（環境省 RDB 絶滅危惧 B II 類）も生息するなど、湧水・湿原環境の生態系が保存されている。徳佐盆地は、青野火山群の噴火で河川がせき止められて出現した古徳佐湖から湖水が流出して形成されたと考えられているが、ジオパーク活動を機にハンノキが生育する湿原は古徳佐湖の名残である可能性が浮上し、現在調査が続けられている。



徳佐盆地のハンノキ

📍 2-3-2 文化サイト

① 大板山たたら製鉄遺跡 | 花崗岩地帯のアカマツ群落と製鉄業



大板山たたら製鉄遺跡

花崗岩地域に分布するアカマツ群落を“たたら製鉄”の燃料として利用した、江戸時代中―末期の人々の知恵に触れることができる。

大板山たたら製鉄遺跡は、江戸時代中期から幕末にかけて操業された“たたら場”である。日本の近代化のさきがけに位置づけられている、長州藩による西洋技術を元にした造船の際に使われた碇や船釘などの鉄具類の供給源

であったことがわかっている。たたら場は、燃料の木炭を豊富に供給可能な地につくられる。大板山周辺は、白亜紀後期の花崗岩類が広く分布しマサ土質の貧栄養な土壌であるが、燃料として優秀なアカマツはそういった環境下でも生育することができるために群落を形成している。

② 萩焼古窯跡群^{こようせき} | 花崗岩・玄武岩の風化粘土と萩焼

花崗岩と玄武岩が風化した粘土を用い、江戸時代初期から続く萩の代表的な工芸品をつくり上げた人々の知恵に触れることができる。

幕府や諸大名への献上品として多用された 400 年以上の歴史を誇る萩焼は、申請地域に分布する白亜紀後期の花崗岩類が風化した粘土と、新第三紀に形成された火山島である萩沖の見島の玄武岩が風化した粘土を用い、傾斜地につくった登り窯によって焼き上げる陶器である。萩焼古窯跡群は、江戸初期に陶工たちが集団で利用していた登り窯の跡が残っており、地質や地形を利用して試行錯誤を繰り返した現場を見ることができる。

萩焼古窯跡（埋蔵文化財）



③ 笠山石切り場跡 | 安山岩質溶岩の石材利用

阿武火山群の安山岩質溶岩を利用して、江戸時代の城下町を建造した人々の知恵に触れることができる。

萩城下町は海岸砂丘や三角州に築かれ、基礎石をはじめとして大量の石材が必要だった。阿武火山群の溶岩（安山岩）は、加工しやすく、風化にも強く、耐火性もあり、多用されている。特に、萩三角州から約 3km 北東に位置する笠山の海岸には、石切り場の痕跡が広範囲にみとめられる。採石のためにクサビを打ち込んだ矢跡は、溶岩の流れによって引き伸ばされた気泡（石の目）の向きに沿っており、石工たちが岩石の性質を利用していたことがよくわかる。



笠山石切り場跡

2-4 各サイトの関連性と申請地域のテーマ

「維新とマグマの胎動の地」

萩は、古くは弥生時代から、地方の有力者が治める都市が存在してきた。特に江戸時代には萩三角州に城下町が築かれ、最大人口 3 万人という地方の一大都市にまで発展した。建築資材、食料、資金などどれも大量に必要となる城下町を、今と違って知識も技術も未熟な時代に築くことができたのはなぜだろうか。その理由を紐解くと、1 億年に及ぶ 3 つのマグマの活動が生んだ萩特有の地質や地形を巧みに利用して独自の文化を発展させた人々の足跡が見えてくる。

● 大陸のマグマの胎動と萩焼

江戸時代初期から萩を代表する工芸品「萩焼」は、花崗岩質岩石の風化によってできた粘土からつくられる。この粘土は高温で焼き上げることができるため、比較的短時間で温度を上げ一気に焼き上げることで特有の素朴な風合が生み出される。白亜紀の大規模火成活動によって大量の流紋岩質凝灰岩や花崗岩体が分布していることが、全国に誇る萩の伝統文化を育む礎となった。



萩焼

● 日本海のマグマの胎動と漁業集落

萩の沖合に浮かぶ見島を形成した日本海拡大後の火山活動は、周辺の海底に広大な溶岩流の凸凹地形も生んだ。これが大規模な魚礁となり、古くから山陰地方や九州からも漁船が集まる一大漁場をもたらした。萩の豊富な海産物は日本海のマグマ活動が支えており、沿岸地域の漁村集落の発展に繋がった。



萩の豊富な魚

● 島弧のマグマの胎動と農業集落

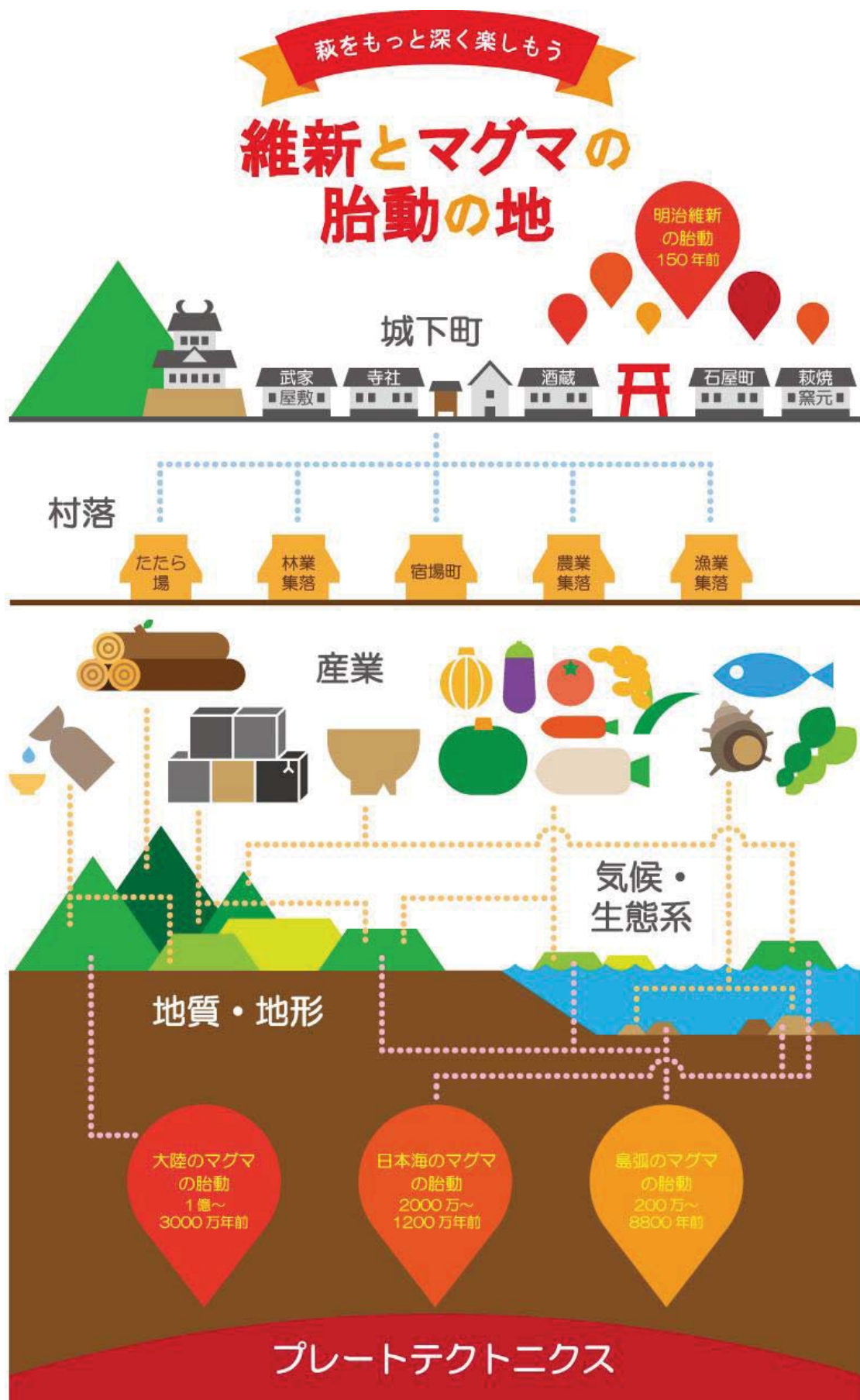
第四紀の島弧火山活動である阿武火山群は、平坦な溶岩台地を形成するという特徴から、日当たりと水はけが良く畑作に最適であるほか、その麓は豊富に水が湧き、稲作にも適している。島弧のマグマ活動によって大きな生産力を生み出す農業集落を各地に発展させることができた。



溶岩台地と水田地

このように、カルデラを形成した大規模な噴火活動、海底火山、単成火山のような小さな火山体を形成した活動は、その後の町作りや人々の生活に大きな影響を与えてきた。28 ページに申請地域の大地と人の相関関係を示す。1 億年間に及ぶ 3 つのマグマの活動がつくった多様な地質・地形が、城下町という複雑な人間社会を構築できるほどの多様な産業の集落体型（農業、漁業、石材業、林業、たたら製鉄、工芸品など）を支えていたことがわかる。

萩における城下町の形成と大地のつながりを紐解くことは、日本における都市形成のあり方の 1 つを紐解くことともいえる。私たちはジオパークを使って、現代の日本社会に対して「変動帯で社会を築き発展させることはどういうことか」を改めて問いかけようとしている。



申請地域における大地と人の相関関係

3. 地質・地形遺産の保全

3-1 地質・地形遺産の保全の方針

中・長期目標 ジオサイトを正しく守り続ける仕組みをつくる

短期目標 各ジオサイトの保全方針の決定

短期目標達成のための行動

①守るべき
ジオサイトの設定

②ジオサイト
カルテの作成

③ジオサイトに
関する住民説明会

④ジオサイトの
保全計画策定

活動主体

■ 行政機関(山口県、萩市、
山口市、阿武町)

■ 土木・建築関係団体
■ 地域部会

■ 学術顧問
■ 山口大学

地質・地形遺産の保全は、地域住民がその必要性を認識した上で、活用と両立できる形で進めていく。中・長期の目標では、ジオサイトに対して認めた価値を持続できる正しい形で守り続けることができる仕組みを確立することを目指している。そのための最初のステップとして、各ジオサイトの保全方針を2021年までに決定する。現在ジオサイトの調査を学術顧問や大学と連携して進め、その情報を住民と共有するとともに、サイトごとの保全・活用方針を検討している。

3-2 地質・地形遺産の保全の取り組み状況

● ジオサイトの設定

ジオサイトの設定は、過去に現地の調査・研究に携わった研究者と相談をして設定した。萩ジオマスター講座の講師として研究者を招き、その都度(計6回)地域住民に対して講義と現地案内をしていただくと共に、ジオサイト設定について事務局と協議する時間を設けた。学術的な価値を最も理解している方々の意見を反映することができた。

● 地域住民による清掃活動

ジオパーク活動を機に、放課後子ども教室(公民館活動)や中学・高校のクラブ活動の一環として、ジオサイトの保全のための除草作業などのクリーニングを含めた清掃活動と野外巡検を組み合わせた行事が、イラオ火山灰層観察施設や笠山周辺で行われている。地域住民の活動を支援するための萩ジオパーク構想推進協議会の活動支援補助金を利用したジオサイトのクリーニング事業も、畳ヶ淵、龍鱗郷、猿屋の滝、そして



中学生によるクリーニング作業

笠山などの多くの地域で行われている。また長門峡では、遊歩道を歩きながら溪谷の形成史をたどるイベントで、参加者にゴミ袋を配ってジオサイトの清掃を同時に実施した。こうした活動はジオサイトの価値を認識すると同時に保全に対する意識を高める目的で、今後も継続的に取り組んでいきたい。



イベント参加者による
長門峡の清掃活動

● 広域農道建設に関わる山口県萩農林事務所との協議

山口県萩農林事務所からの打診で、現在建設中の広域農道についての協議の場が設けられた。農道建設の過程で出現した火山灰層の大規模露頭の一部を観察施設として保存した経緯もあり、その施設の引き続きの活用と、今後開通予定の広域農道を活用したジオツアーの開催などについて事前の打ち合わせを実施した。また、今後の工事で露頭が出現した場合に、調査や保全の検討を速やかに進めるためにも連絡体制をつくっていく方針についても話し合った。

3-3 地質・地形遺産の保全の課題と展望

地形・地質遺産の保全は、ジオパーク活動の中心課題である。本申請地域では、道路建設・拡張や水道整備等のインフラ整備事業によるジオサイトの破壊が懸念されている。ジオサイトの保全を行うために、地域の地質遺産の保全計画を策定する必要がある。そのため、将来的には各ジオサイトの保全方針の共有や、着工時に新たに現れた露頭の情報提供、調査研究への理解を得ることを目指して行政機関や土木・建築関係団体と協議を進めている。また、地域住民のサイト保全に対する意識の醸成のために、ジオサイトの清掃活動も併せて実施している。

4. 教育活動、研究支援活動

4-1 教育活動

4-1-1 教育活動の方針

中・長期目標 住民が土地の成り立ちと暮らしの関係を語れるようになる

短期目標 ジオパークの教育に携わる人材と仕組みの完成

短期目標達成のための行動

①学校向けジオパーク
利用ガイドの作成

②学校教員向け
ジオパーク利用研修

③ジオマスター・ジオガイド
主体の授業や研修会

活動主体

■ ジオな教育推進委員会
■ 教育・普及部会

■ 地域部会
■ ジオプランナー

■ ジオガイド

ジオパークにおける教育活動は、地域住民が自分たちの暮らしている大地の成り立ちや特徴を理解し、大地と人の共生に対する意識を醸成する活動である。中・長期的には、住民が土地の成り立ちと自分たちの暮らしとの関係性に気づき、語ることができるようになることを目標とし、短期的（2021年を目途）にはジオパークの教育に携わる人材と仕組みをつくることを目指している。特に、地域の大人が地域の子どもを育てる場づくりのため、学校教育と地域部会やジオプランナー・ジオガイドの連携が重要と考えている。

4-1-2 教育活動の取り組み状況

● ジオな教育推進委員会と教育・普及部会

萩市教育委員会に「萩ジオパーク構想推進プロジェクト委員会（通称：ジオな教育推進委員会）」を設置し、7名の小中学校教員を委員に任命している。2～3ヶ月に1回のペースで会を催し、学校現場におけるジオパークの活用についての検討を進めている。これまでに、小中学校の教員向けアンケートの実施や、子ども向け配布物の作成などを行っている。

教育・普及部会は萩市教育長を部会長とし、萩市内の全小中学校に1名ずつ任命したジオパーク担当教員で構成されている。年2～3回程度部会を開催し、現状報告、情報共有やジオな教育推進委員会からの提案などを行っている。2018年2月に開催された教育普及部会からは阿武町の小中学校からも教員が参加し、学校現場におけるジオパーク活用の方針を共有した。



教育・普及部会

● 出前講座の開催状況

公民館などを会場にした出前講座をこれまで4年間で120回、小中学校・高校における出前授業を78回行ってきた。内容は、ジオパークプログラムについての解説から、地球科学的な講義、町歩き形式まで幅広く、事務局スタッフを中心に、場合によっては外部講師を招いて行ってきた。特にジオパーク活動が活発化し、メディアへの露出も多くなった2017年度は、出前講座の依頼が多く、地域住民の関心が高まっている実感がある。

● 地域住民による子ども向け教育プログラムの開発（越ヶ浜の事例）

阿武火山群で最も若い「笠山」の麓の集落である越ヶ浜では、ジオパークの手法を活用した地域づくりについての住民による会議を2017年8月から月に1～2回の頻度で開催している。地域の将来像を自ら設定することから始め、全ての活動の基盤となる“笠山の成り立ちと越ヶ浜の文化の関係性”を示した相関図の作成などを経て、現在は地元の小学生を対象にした教育プログラムの開発に着手している。放課後子ども教室という、地域住民が課外で子どもの育成に携わる既存



ある日の会議の様子



の仕組みを利用し、ジオツアーの準備を進めている。今後、地域住民の手で地域の子もたちを育てていく仕組みづくりを展開していく上で、この越ヶ浜の事例はモデルとなるものである。

放課後子ども教室で実施する、火山としての笠山を体感するための子ども向けジオツアーの設計図

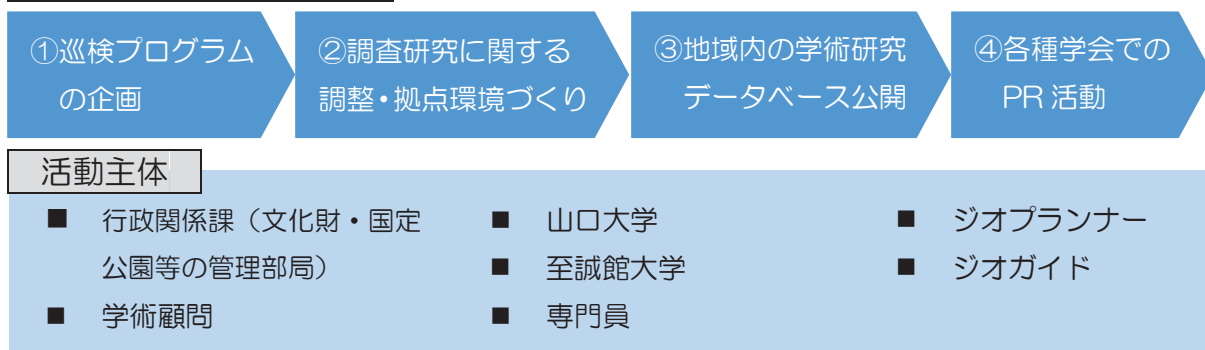
📍 4-1-3 教育活動の課題と展望

学校教育におけるジオパークの活用については、教育委員会と学校現場、地域住民と学校現場の連携の仕組みができつつあり、具体的な事例も生まれている。今後は、徐々に育ちつつあるジオプランナーやジオガイドが自ら教育プログラムを開発し、主体的に教育活動に関わる流れをつくることや、より多くの専門家に教育現場に携わってもらう機会づくりを進めようとしている。

4-2 研究支援活動

4-2-1 研究支援の方針

中・長期目標	継続的に学術研究が行われる環境づくり
短期目標	研究者が調査・研究しやすい受け入れ体制を整える
短期目標達成のための行動	



ジオパークにおいて学術研究（特に地球科学分野）は全ての活動の基盤となる重要な活動である。調査・研究が継続的に行われ、技術の進歩と共に常に最新の知見を得続けていくための環境づくりを中・長期的に進めていく。短期的（2021年を目途）には、研究者が調査・研究しやすい受け入れ体制を整備することを目標としている。学術顧問や山口大学等と連携しながら、学術研究の入口としての大学向け地学巡検プログラムの企画を、ジオプランナーやジオガイドとともに行う。また、現地調査の際の補助になるように各種申請手続きの明確化、調査拠点等の環境整備、文献等のデータベースの作成と公開等を進め、各関係学会でPR活動を展開し研究者への周知を図る。

4-2-2 研究支援の取組事例

● 調査・研究助成事業

萩市では「萩ジオパーク構想研究チャレンジ助成事業」として申請地域内における調査研究事業1件につき上限20万円の助成を行った。2016、2017年度の2年間で3件が実施された。

● 萩ジオマスター講座における巡検モデルコースの実施

前述の萩ジオマスター講座（全12回）のうち5回は、申請地域内を対象にした学術論文の著者を講師に招き、座学と野外巡検を実施した。これは、地域住民が地質・地形遺産の価値を認識する目的のほかに、学生や研究者向けの地学巡検のコースを検討するねらいもあった。これにより、半日（3～4時間）の巡検5コース（「ペルム紀付加体形成（Mine 秋吉台ジオパーク）」「白亜紀後期の大規模火成活動」「日本海形成と海底火山活動」「阿武火山群①（スコリアラフトと玄武岩溶岩流）」「阿武火山群②（安山岩質溶岩台地と



萩ジオマスター講座の野外巡検

スコリア丘の形成)」の設定が見込まれている。

● 巡検の受入れ



山口地理学会の巡検の受入れの様子

申請地域のうち、須佐湾周辺、笠山、長門峡などは山口大学をはじめ県内外の大学や山口地学会・地理学会の地学巡検のフィールドとして活用されてきた。近年は協議会事務局に事前連絡をいただけることも増え、職員が同行することもある。これまでは学校が直接現地と各種手続き等のやり取りをして実施されていたが、今後は萩ジオパークが窓口となって現地調整を進めることで、更なる利用促進を図ると同時に、地域住民と研究者の交流の機会としても発展させていきたい。

📍 4-2-3 研究支援の課題と展望

調査・研究助成事業として、これまで2年間で3件の研究資金を提供し、成果も得られた。しかし、ただ資金を用意して研究者を待ち、研究内容や助成金の使い道は受取人まかせの現在の形式は、本質的な研究支援とは言い難い。今後は、研究者に関心を持ってもらえるよう、地学巡検の誘致や、野外調査に関わる各種申請手続きの明確化、調査拠点の整備、文献データベースの公開など、研究しやすい環境を整えることに方針を転換していく。

5. 地域の持続可能な発展

5-1 地域の持続可能な発展のための人材育成

ジオパークを活用した地域の持続可能な発展のために最も必要なのは、地域住民の一人一人がジオパークの構成員であることを自覚し、共通の思想を持って行動することであると考えている。ジオパークの理念を本質的に理解し、地域経済活動、ジオツーリズム、その他の地域住民の活動の中心となって動ける人材を育てることを目的とし、2017年度に「萩ジオマスター講座」を開講した。様々な活動に関わる豊富な人材が育っただけでなく、新たな人と人のつながりも生まれ、地域の盛り上がりにもつながっている。以下にその概要を示す。

● 萩ジオマスター講座

2017年度に申請地域の住民を対象に「萩ジオマスター講座」を実施した。のべ参加者数500名を超える大変な大反響で、地域内のジオパーク活動の知名度と関心が飛躍的に高まった。

萩ジオマスター講座は『大地と人のつながりを楽しもう』をテーマにした全12回の連続講座である。地域の地質・地形の成り立ちを扱った必修講座6回と、食や工芸品などに焦点を当てて地質・地形と人との関わりを題材にした選択講座6回で構成され、必修6回と選択1回を受講した者を萩ジオマスターとして認定した。



必修① ガイダンス（9/26） ジオパークによる地域の描き方と楽しみ方 講師：北村久子（室戸市観光ガイドの会）	選択① （10/10） 萩に関わる地球の歴史 講師：脇田浩二（山口大学）
必修② （9/30） 萩の大地の成り立ちⅠ～南の海から来た大地～ 講師：Mine 秋吉台 GP ガイド	選択② （11/18） 萩焼はなぜ美しい 講師：坂 悠太（坂高麗左衛門窯）
必修③ （10/7） 萩の大地の成り立ちⅡ～白亜紀の火成活動～ 講師：今岡照喜（山口大学）	選択③ （11/19） 萩の農作物はなぜ美味しい 講師：田村健二（むつみ千石台出荷組合）
必修④ （12/03） 萩の大地の成り立ちⅢ～日本海誕生と火成活動～ 講師：今岡照喜（山口大学）	選択④ （11/23） 萩の酒はなぜ美味しい 講師：三好隆太郎（阿武の鶴酒造）、岩崎喜一郎（岩崎酒造）
必修⑤ （11/5） 萩の大地の成り立ちⅣ～阿武火山群その1～ 講師：角縁 進（佐賀大学）	選択⑤ （12/2） 萩の魚はなぜ美味しい 講師：山口 泉（萩シーマーと）、野村京子（栄養士）
必修⑥ （11/25） 萩の大地の成り立ちⅤ～阿武火山群その2～ 講師：清杉孝司（神戸大学）	選択⑥ （1/14） 萩城下町はどうしてできた 講師：樋口尚樹（萩ジオパーク支援員）

初回の申込みが 60 名程度だったのが、口コミで評判が広がり回を重ねるごとに申し込み数が増加、最終的には合計で 2 倍近い 113 名（のべ 500 名以上）が参加した。参加者の大半は萩ジオパーク構想のエリアである萩市、山口市、阿武町の住民であったが、遠くは島根県や大阪府から通う参加者もいた。萩ジオマスターの認定者は 45 名であった。



萩ジオマスター講座修了式の記念写真

本講座は、ジオパーク活動に関わるあらゆる分野の人材を育成する入口として位置づけ、ジオパークの概念を“体験”によって理解することに重きを置き、ジオパークの思想の本質的な普及をねらいとした。萩ジオマスターの心得である『萩ジオマスター宣言』を以下に示す。

萩ジオマスター宣言

私たち、萩ジオマスターは、
萩ジオパーク構想を誰よりも上手に楽しみます。
「大地の成り立ちと人のつながり」という視点を大切にし、
“萩らしさ”をこれまで以上に深く味わいます。

- 一、日本列島の成り立ちと、その流れの中での萩の大地の成り立ちを景色の中から読み解きます。
- 一、萩の文化を地質や地形などの自然環境の背景から理解します。
- 一、地質や地形などの自然環境に適した方法で“萩ならではの”衣・食・住を楽しみます。
- 一、多種多様な業種の人たちと手を取り合って新たな“萩らしさ”をつくり、自ら楽しみながら後世に伝えていきます。
- 一、「ジオパーク」という単語を使わずにジオパークを自分なりの言葉で伝え、より多くの人たちと楽しみを共有します。



萩ジオマスター講座は多くの効果をもたらした。例えば、講師の研究者との打合せや巡検で新たな研究の可能性が見出されたり、新たな人と人のつながり（地域住民と研究者・生産者、地域住民同士など）が生まれたりしている。萩ジオマスター認定者の中からは「今後も継続的につながっていききたい」という声が自発的にあがり「萩ジオ友の会」という会が発足し、定期的に集まって野外探訪に出かけるといった活動が始まっている。萩ジオマスターを対象にした、ジオツアーの企画人である「萩ジオプランナー」の養成講座も開講し、現在はジオツアーの企画とモニターツアーを繰り返し行っている。



また、地域住民向けの普及活動の一環として実施した講座であったが、観光分野のメディアからも注目され、いくつもの取材を受けた（例えば日本観光振興協会の機関紙「観光とまちづくり」、Web サイト「観光 Re:デザイン」等）。日本社会でジオツーリズムがなかなか浸透しない中、本講座の内容なら観光事業者にも興味を持ってもらえるという可能性が見えてきた。

このように、ジオパークの思想を持ち、自ら考えて行動できる人材が地域住民の中に育ってきたことは、ジオパークとしてのまちづくりの大きな前進である。萩ジオマスター講座は地域住民のジオパーク活動の入口として毎年開催しつつ、2017 年度の成果を踏まえ、地球科学の専門分野に特化した講座や食の講座などを独立させて充実させる形で、住民のさらなる高い意識の醸成を図っていく予定である。



Web サイト「観光 Re:デザイン」への掲載



大地と人の
つながりを
楽しもう。

- 萩の大地をつくった3つのマグマ
- 萩焼はなぜ美しい？
- 萩の農産物はなぜ美味しい？
- 萩の海産物はなぜ美味しい？
- 萩の酒はなぜ美味しい？
- 萩城下町はどうしてできた？



大地を知ろう。
地球に触れよう。

- 南の海から来た大地
- 大噴火を起こした大陸のマグマの胎動
- 日本海をつくったマグマの胎動
- 現在の萩をつくったマグマの胎動



地球×生産者×料理人

- マグマが生んだ大地のごちそう
- マグマが生んだ海のごちそう
- マグマが生んだうまい酒



あなたが地球と
つながる時間。

- お菓子なジオパークめぐり
- 他所の地域とおしゃべりタイム

地域住民向け普及企画（2018 年度）

5-2 地域経済活動

5-2-1 地場産業の振興

① 地場産業の振興の方針

中・長期目標 「見る」「遊ぶ」「食べる」の全てで大地と人のつながりを感じられる地域づくり

短期目標 ジオパーク的に見る・遊ぶ・食べるための拠点の完成

短期目標達成のための行動

①食のジオ的な整理
(大地と食のつながり)

②体験のジオ的な整理・開発
(大地とつながる体験)

③ジオパーク的な体験・
食の情報発信拠点の整備

活動主体

- | | | |
|--------------|----------|-----------|
| ■ 生産者 | ■ 食品企業 | ■ ジオプランナー |
| ■ NPO 萩元気食の会 | ■ 体験提供団体 | ■ その他市民団体 |

中・長期の目標は、「見る」「遊ぶ」「食べる」という行動の全てにおいて大地と人のつながりを実感できる地域をつくることである。そのために、観光客や地域住民が萩のまちをジオパーク的に（地球科学的な視点、大地と人のつながりという視点で）見て、遊んで、食べることができるための拠点を2021年までに完成させる。

目標の達成のためには、多種多様な人材・団体が総力戦で取り組む必要があるが、まずは最も身近な行動である「食」に関する活動、そして次に「体験」できる仕組みづくりに取り組んでいる。

萩は古くから萩焼や夏みかんの産地として知られ、また近年は海産物や農産物を中心に地場産品のブランド化に力を入れている（瀬つきアジ、千石台だいこんなど）。ジオパーク活動によって新しい規格を生み出すのではなく、こうした既存の地場産品に対して地球科学の視点から見た「萩だからこそ」の価値を付加することで、地場産業の振興に取り組む。そのために、生産者と消費者が共に生産現場の土地の成り立ちについてより深く理解し、さらなる価値を認識することができる環境づくりを進めている。

② 地場産業の振興に関わる取組状況

● 萩ジオマスター講座による生産者とのつながりづくり

萩ジオマスター講座（全12回）のうち5回は「大地と人のつながり」をテーマに、萩の農・海産物、日本酒、工芸品を題材にし、地質・地形と人の文化の関係性を、体験を通して知る内容とした。その際にこだわったのは生産者に講師をしてもらうことである。説得力のある現場の生の声を聞くことができるだけでなく、生産者自身にもジオパーク的な視点、生産物の新たな価値に気がついてもらうねらいもあった。講座を受け入れてくれた生産者からは、最初は「どうしてうち



萩ジオマスター講座（萩の酒はなぜ美味しい）の一場面

でジオパーク？」と疑問の声も聞かれたが、打合せや本番を通じて、面白さや重要性を感じてもらうことができた。

これに関わった山口県萩農林事務所からは、次に題材にして欲しい農作物の提案があり、また、海産物を扱った回の講師をお願いした栄養士の方からは、その後の児童向けの食育の講演の際にジオパークと連携したいという依頼をいただいております、地場産業や食に関する人たちとの継続的な関係性を築くことができています。

● 道の駅イベントへのブース出展

2017年10月に道の駅「萩シーマーと」にて行われた「萩・魚まつり」にジオパークのPRコーナーを出展した。新鮮な地物の魚を多く扱っている萩シーマーとと共同で企画を練り、『萩はどうしておいしい魚がたくさんとれるの?』をテーマにしたクイズ形式のブースを設置した。萩の魚がおいしい、萩ならではの理由を伝えることをねらいとし、阿武火山群と海の生態系、地形や魚種に適した漁法などを紹介した。ブースには県内外から約200人が訪れ、「魚や景色の見方が変わった」という感激の声が多く聞かれた。今後も、単純に地質や地形の紹介をするのではなく、食材などの身近なものの理由を伝えることで、地域住民や観光客の価値観に変化をもたらすための活動を続けていこうと考えている。



「萩・魚まつり」でのブース出展の様子

● ジオなべ

2018年1月20日に開催された「萩・明治維新150年記念オープニングイベント開会式」において“ジオなべ”と称した鍋料理をふるまった。萩で地産地消をテーマに活動し、食に関わる様々な業種（飲食店や食品加工業など）の人たちで構成される「NPO 萩元気食の会」との連携で実現した。萩の農産物・海産物がなぜ美味しいのかというパネル展示と合わせて、地元産にこだわった2種類の鍋を提供した。当日は萩ジオマスター認定者も駆けつけ、総力戦で約400杯をふるまった。その後、他のイベントでも実施の依頼があり、定番の一つとなりつつある。NPO 萩元気食の会は、これを機に萩ジオパーク構想推進協議会に加盟した（2018年3月）。



萩の海産物を使った
“海のジオなべ”



ジオなべお振る舞いの様子

③ 地場産業の振興の課題と展望

萩ジオマスター講座によって、様々な分野の生産者とのつながりができ、それがきっかけとなって前述のように今まで無かった事業が次々と生まれている。今後は、出前講座やイベントの域を出て、情報や新たな付加価値のついた商品が日常的に消費者に届く仕組みづくりを生産者と共に進めていくことが必要と考えている。そのためには、第二次・第三次産業との連携を展開していくことが今後の課題である。

5-2-2 広報戦略

① 広報戦略の方針

中・長期目標 近隣都市圏（福岡・広島）の若い世代も萩に足を運びたくなる広報活動を展開する

短期目標 地域住民がジオパーク活動を本質的に理解する

短期目標達成のための行動

①各種メディアを利用した
住民に対する活動の可視化

②萩ジオマスター講座
の開催

③住民向けジオツアー・
イベントの開催

活動主体

- 推協だより編集委員会
- はぎ時事新聞

- 萩ケーブルネットワーク（CATV）

- 萩ジオマスター
- 行政機関
- 地域振興部会

日本ジオパークにおける広報活動は、それぞれの地域の魅力発信にとどまらず、日本中にジオパークの面白さと社会における必要性の認識を高めることと考えている。萩ジオパーク構想は、中・長期的目標として、近隣都市（福岡・広島）の若年層にも響く広報活動を展開することとしている。日本社会においてジオパークという新しい切り口の物の見方や考え方は浸透しているとは言いがたい。旅や生活の一つの手段として定番化していくためには、柔軟な発想を持ち、社会に新常識を生み出す力のある若者たちに面白がってもらえることが必要と考えている。当面は、地域住民の意識改革を進める必要があるため、短期目標（2021年を目途）を地域住民がジオパーク活動を本質的に理解することとしている。

② 広報の取組事例

● 萩ジオパーク構想推進協議会だより・各種コラム掲載

協議会会員や地域住民向けに活動報告を目的として、広報誌「萩ジオパーク構想推進協議会だより」を2015年8月から月に1～2回発行している。毎月編集会議を開催し、紙面構成や行事予定、執筆担当の割り振りを話し合って発行している。執筆は、事務局職員とジオパーク支援員を中心に、行事参加者やジオマスターが担当することもある。萩ジオパーク構想推進協議会会員（2018年3月現在123名）や県・市議会議員、学校に発送するほか、ビジターセンター、道の駅、公民館等の施設で配布、ホームページでもデータを公開している。本誌を見て行事予定を知り、参加申込みをする人も多い。

推進協議会だより以外にも2017年度からは萩市報で毎月0.5～1ページ分がジオパークに割り当てられているほか、地域新聞「はぎ時事」でも2018年4月からコラム連載が始まり、地域住民からはジオパークに関する話題を目にする機会が増えたという声も聞かれる。

● 萩ケーブルテレビ番組「萩ジオさんぽ～下を向いて歩こう～」

2017年6月から、ケーブルテレビのニュース番組内の特集枠で「萩ジオさんぽ～下を向いて歩こう～」の放送が始まった。2～3ヶ月に1回のペースで撮影され、2017年度は4回が放送された。中学生や高校生をはじめ地域住民をゲストに招いて、萩ならではの景観や文化を地質・地形の背景から読み解いていく内容である。企画はケーブルテレビスタッフと専門員とで進めている。2018年4月からは単独番組として独立し、週3～4回のペースで繰り返し再放送されることが決まっている。毎回、「面白かった」「勉強になる」といった視聴者からの反響があり、出演者からも再出演の依頼を受けている。今後は、Web配信や拠点施設等での放映を検討していきたい。



萩ジオさんぽの撮影の様子

推進協議会の委員でもある萩ケーブルネットワークは、テレビのほかにコミュニティFMもある。2017年からは月に2回、専門員がスタジオに赴き、約45分間のラジオ出演をして情報発信をしている。このように紙面だけではなくあらゆる媒体を使うことで、地域住民の目に触れる機会がさらに増えている。これらの成果もあって、萩ジオマスター講座の参加者が110名を超えるなど、各種行事の参加者数が急増している。



ある日のFM放送後

③ 広報戦略の課題と展望

市報、推進協議会だよりのほか、地方新聞、ローカルテレビ・ラジオ、SNSなど、地域住民に向けてはあらゆる手段で情報を定期的に発信し、徐々にジオパークに対する理解は進んできている。次の課題は、地域外への情報発信である。現地で体験できるプログラム開発の進行状況と連動しながら、ターゲットを意識した手法を用いた戦略的な情報発信を進めていく。

5-3 ジオツーリズムの可能性

5-3-1 ジオツーリズムの方針

長・中期目標 ジオツアーが定番化し、新しい雇用も生む

短期目標 ジオツアーの商品化

短期目標達成のための行動

①ジオプランナー（企画者）・
ジオガイド（案内者）の養成

②モニターツアー
の実施

③ガイド組織
の立ち上げ

④ジオツアー
の商品化

活動主体

■ ジオプランナー

■ 生産者

■ その他市民団体

■ ジオガイド

■ 体験提供団体

ジオツーリズムはジオパークにおける主要な経済活動の一つである。しかし、日本において知名度が低く、浸透しているとはいえない。申請地域では、城下町の古い町並みや神社などをめぐる歴史観光が定番として確立されているが、自然を楽しむ、あるいは地質や地形などの自然環境と合わせて町並みを楽しむことができるジオツアーを新しい選択肢として提供し、それに関わる人材（ガイドなど）の新しい雇用を生むことを長・中期目標としている。2021年までには、ジオツーリズムに関わる人材（ツアー企画者、案内人など）を育成し、モニターツアーを繰り返し実施し、ジオツアーの商品化を目指す。

5-3-2 ジオツーリズムの取り組み状況

● ジオプランナー・ジオガイド養成講座による本気の人材育成

ジオツアーの本格的な商品化に向けて、企画の専門家である“萩ジオプランナー”と、現地案内の専門家である“萩ジオガイド”の2分野の新たな人材育成に着手している。

2018年2月に開催した萩ジオプランナー養成講座では、萩ジオマスター認定者を対象に「伝える技術（インタープリテーション）」と「つなげる技術（ジオストーリーづくり）」を磨くための2日間の研修を行った。ジオマスター講座でインプットした知識を、アウトプットする手法について集中的に研修をした。



インタープリテーション研修

ジオガイドの養成はインタープリテーションの外部講師と相談し、五感を使った体験を取り入れた案内を提供できるガイドの育成を計画的に進めていくことにしている。これまでの協議の結果、場所ごとに見られる景色や伝えたいメッセージは異なるが、全ての地域で共通のネイチャーゲーム等の体験を導入しようとしている。萩ジオパーク全体としての統一感を出せるだけでなく、地質や地形の違いをより際立たせて体感させることができる効果が見込まれる。1年で2地域程

度のジオガイドの育成を目指し、年を追うごとに提供プログラムが増えていく、成長するジオパークをつくっていく。

● ジオプランナーの企画・運営によるモニターツアーの実施

萩ジオプランナー養成講座の受講者は、講座に引き続き会合の場を持ちツアープログラムの企画をした。ツアーのコンセプト、伝えたいメッセージ、メッセージを伝えるための手段、時間配分、役割分担など、全て自ら考えた。新たな実験装置や小道具が生まれたほか、萩ジオプランナーの人脈を生かして遊漁船をチャーターするなどといった“地元住民だからこそできるツアー”が完成した。企画したツアーはモニターツアーとして3月3日、11日に実施し、参加者からアンケートで今後のための意見を収集した。



モニターツアーの企画会議

「大変だったが楽しかった。」「ぜひ続けたい。」という声上がり、「萩ジオプランナーの会」が結成された。現在は、次のモニターツアーの企画はもちろん、萩市役所の新規採用職員向けのジオパーク研修の企画もしている。今後は、ジオガイドとの連携はもちろんのこと、地元企業や生産者とのコラボレーションなども進めていく予定である。



モニターツアー（2018年3月）の様子

📍 5-3-3 ジオツーリズムの課題と展望

ジオプランナーはモニターツアーを実施するなど、順調に育ってきている。一方でジオガイドは主要なジオサイトやビューポイントごとに養成する必要がある、エリア全域でガイドプログラムを提供できるようになるまでには複数年の時間を要する。ガイド技術のアドバイザーとも相談し、一方的な語りではなく五感を使った体験的手法を取り入れ、子どもから大人まで幅広い世代を満足させることができる質の高いガイドを育成するため、戦略的・計画的に研修を実施していく。また、次の段階として旅行代理店、ホテルや旅館、飲食店、タクシー事業者等との連携を見据えた調整も並行して進めていく。

5-4 地域住民の活動

5-4-1 地域住民の活動に関する方針

長・中期目標 住民が主体的に活動し、かつジオパーク内が横につながる

短期目標 地域部会制の実現

活動主体

- | | | |
|-------------|------------|----------|
| ■ 地域部会 | ■ 総合事務所・支所 | ■ 小中学校 |
| ■ 農協・漁協・商工会 | ■ 公民館 | ■ ジオマスター |

萩ジオパーク構想が目指す地域住民の活動のあり方は、住民ひとりひとりが明確なビジョンを持ち、その実現のために正しい知識に基づいて自ら考え、自ら行動することである。申請地域は2市1町で構成され範囲が広く、また集落ごとに風習や習慣も大きく異なるため、全域で足並みをそろえながらの活動展開は非現実的である。2021年までには、住民の意識に根付いている地域単位（おおむね平成の合併前の旧萩市・旭村・川上村・福栄村・むつみ村・須佐町・田万川町、旧阿東町および阿武町）で地域部会制を実現し、かつ地域ごとのビジョンや活動状況、全地域共通のビジョンを互いに共有し、横につながる仕組みをつくろうとしている。

5-4-2 地域住民の活動状況

● 住民によるビジョン形成と活動展開（地域部会制の前身モデル）

阿武火山群の一つである笠山周辺の越ヶ浜集落において、2017年8月から月に1～2回の頻度でジオパーク活動の企画会議を定期開催している。越ヶ浜の住民と笠山で活動しているガイド、事務局員で構成され、毎回5～15名程度が参加している。これまでにジオパークの手法を活用した地域の将来像の設定、対象者の検討、地域の大地と人のつながりの相関図作成、開発すべき体験プログラムの検討、活動拠点施設の機能と設備の検討を話し合い、計画的に活動を展開している。



越ヶ浜での会議の様子

現在、放課後子ども教室との連携で地元の子ども向けジオツアーの企画を進めている。

毎回、ワークショップ形式で参加者が自ら考えてビジョン形成と目標設定、作業手順を検討する作業を繰り返しており、現在は参加者の自発的な行動が生まれ始めている。これを地域部会制のモデルとし、各地域で地域の状況に合わせて住民主体のチームを結成していこうと考えている。

● 住民と共につくった案内看板

阿武火山群の一つである伊良尾山とその周辺地域では、火山学者による伊良尾山の研究やアウトリーチ活動をきっかけに溶岩流を「龍が通った道」と呼び、様々な地域おこし活動に取り組んでいる。この地域に2017年度に萩ジオパーク構想として初めての案内看板を建てるにあたり、活

動している地域住民と看板の内容の検討をした。タイトル、地図の範囲、解説内容、色調の選択、写真の選定など、4ヶ月間で4回の協議を重ねた。来訪者の案内役である地域住民が自ら制作に携わることで、実用的な看板を設置することができた。設置後には、住民が看板のお披露目式を企画し、60名以上が集まる盛大な会が催された。



左) 看板内容の協議の様子 右) 案内看板お披露目式の集合写真

● ジオパーク活動応援事業

協議会では2016年度より、地域住民によるジオパーク活動を支援するために1件につき上限30万円の活動応援補助金を設けている。これまでに6件が採用されている。

NPO あとうが活動主体となり阿東地域で実施した長門峡ジオガイド育成事業（2017年度）では、モニターツアーと振り返りワークショップを繰り返すことで、ツアープログラムと人材の育成を行った。これまでになかったツアー内容や新しい食事メニューが開発されたほか、集客の少なかった山口市民のリピーター獲得にも結びつこうとしている。



NPO あとうの古徳佐湖ツアー

📍 5-4-3 地域住民の活動に関する課題と展望

地域住民の活動は、ジオパーク活動の中核に位置づけられる。まず地域住民がジオパーク活動を理解し、独自の活動を推進するための教育・普及活動に取り組んでいる。その際、意欲の高い地域でボトムアップの活動を開始し、その成功例に基づいて他の地域へ次第に活動の輪を広げている。地域間の交流や複数地域の共同事業などを推進し、地域間が有機的に連携し、申請地域全体としての一体感が生まれるような仕組みを目指して活動している。

課題は、各地域間が有機的に連携し、エリア全体の一体感を生む仕組みをいかにつくるかである。地域間の交流や複数地域の共同事業などを進める中で、横のつながりが機能する仕組みを模索したい。

6. 日本ジオパークに立候補する背景と理由

私たちは「地球目線で萩らしさが“見える”“伝わる”まち」を目指している。地域の人間活動の基盤である地質・地形を正しく理解し、かつそれと向き合って文化を築いてきた先人の知恵を読み解くことで、これまで守ってきた文化財を始めとする現在の私たちの財産（歴史・文化）を本質的に理解し、地球科学的視点に立って持続可能な形での“開発”を目指している。

萩は、古くから日本における文化財保護活動の先頭に立ち、地域の遺産を後世に伝えるための数々の先駆的な取組を行ってきた。大正期に日本における記念物の保護法が確立して早々に、長門峡、明神池、須佐湾などが名勝や天然記念物の指定を次々と受けたほか、全国でも早い段階で景観条例を制定し、城下町の一部は最初の国選定重要伝統的建造物群保存地区になった。しかし、“保護活動”を続けるだけでは、まちは発展しない。私たちが今ジオパークに取り組むことは、『過去を未来に伝える』ことから『過去から学び未来を創る』ことへと本格的に舵を切り、持続可能な地域発展を目指して前進しようという決意である。以上が申請理由であり、以下にその背景を示す。

ジオパーク活動による地域の変化

4 年前から始まったジオパーク活動は地域に着実な変化をもたらし、現在では本地域に必要な存在となっている。2016 年の JGN 加盟認定見送り以降、本地域にジオパークは必要かどうかを、地域会議をはじめ各所で繰り返し検討し、保全、教育、地域振興に関わる様々な分野の事業を試行的に行ってきた。その結果、活動に関わる地域住民の数は爆発的に増加し、モデル的に一部地区で取り組んでいる事業を別の地区でもやりたいという声も続々と上がるようになった。さらには、申請地域外の近隣市町村からも講演依頼や共同事業の依頼が入るようになり、もはやジオパーク活動が地域の発展の旗印という位置づけになりつつある。

日本ジオパークネットワークの建て直し

今各地のジオパークそれぞれが抱えている問題を指摘して、新しいジオパークの在り方を萩が提唱し、日本ジオパークの新しい規範となるべき気概を持って臨む覚悟である。それ故に“維新とマグマの胎動の地”をテーマに掲げている。

萩ジオパークで成功した事業をパッケージ化して他地域に対して技術提供し、各地域の特性に合わせつつも、全国である程度の統一規格を展開することを目指している。例えば、2つのジオパーク間でお菓子を送り合い、そのお菓子を使ってお互いの“大地と人のつながり”をテレビ電話で伝え合う『はぎジオカフェ』を複数地域（男鹿半島・大潟 GP、三島村鬼界カルデラ GP、Mine 秋吉台 GP、伊豆大島 GP）と実施している。住民同士の交流だけでなく、1回の機会でも2つの地域が、自分の地域の特徴を身近な物を使って語るができるようになることがねらいである。今後は、『萩ジオマスター講座』やテレビ番組『萩ジオさんぽ』なども手法をネットワーク内に提供していこうと考えている。

ネットワークの活用と日本社会への貢献

萩ジオパークは、ジオパーク的思想をもって日本社会に変革をもたらし、日本国民の意識に「変動帯で生きる」という自覚を芽生えさせたいと考えている。これが日本における持続可能な発展へのジオパークがなすべき貢献であり、その実現こそが、萩ジオパークが日本ジオパークネットワークに加盟を申請する真の目的である。

地域の発展だけが JGN 加盟の目的ではない。日本社会に変革をもたらすという、1 つの地域では困難な活動をネットワークによって実現することである。ネットワーク活動によってジオツーリズムを日本における観光手段の一つとして定着させ、ESD の土壌としての地位を確立することである。

地を離れて人なく、人を離れて事なし。
故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ。

明治維新で活躍する数多くの人材を育てた吉田松陰の言葉である。日本社会の発展のためには、まず変動帯としての日本列島と向き合わなければならない。日本ジオパークネットワークが真に機能することができれば、その思想を国民ひとりひとりの潜在意識に根付かせることで持続可能な国づくりを実現できると確信している。